明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

May 20th 1911.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 232

大日本蠶絲會報

第貳百參拾貳號目次

●世界蠶絲業の大勢を論じて本邦蠶絲業の將來に及ぶ　伯爵　大隈重信

●有毒母蛾の蠶卵檢査と絲價高低率　農學士　林驛作

●印度のセンスーンと絲價高低率　長崎縣蠶業主任　古賀次四郎

●蠶種貯藏の場所に就て（佛文）　農學士　石渡繁胤

●蠶室の乾燥換氣及加溫裝置に就て　農學士　鈴木藤三郎

●蠶の血液及背脈管の話　前代議士　廣瀨次郎

●女子教育と蠶業　蠶業社蠶業學校教諭　藤島盈文

●蠶兒の強弱鑑定法　本會編輯主任　加藤知正

●所感の一二三　特別會員　後閑源助

●衛生上より見たる製絲工場　農商務技師　野田忠廣

●桑樹の輪栽法を勸む　前貴族院議員　若尾泰造

●五齡蠶の飼育に就て　蠶業試驗所技師　尾崎幾之

●朝鮮の蠶業　造信委員　戸塚巳之助

●蠶絲業奬勵の終局問題　郡是製絲株式會社長　波多野鶴吉

●渡歐第一回の書信　本會理事　吉野鶴吉

●桑の介殼蟲驅除新法　特別會員　中村慶

●網を使用して分箔を行ふの便法　造常會員　池端正勇

●改良上蔟法に就て　造常會員　坂入高三郎

●優等賞の光榮を擔へる養濟堂製絲會社　河野南嶽

●優等賞の光榮を擔へる佐々木彥五郎君　南嶽

TOKYO.
The Association ;
No. 18 Nishiki-cho Sanchome, Kanda, Japan.

米國市場に於て伊佛生絲を凌駕し好評嘖々たる本邦輸出一本經絲は本器使用製絲家のみによりて生産せらる

事實已に斯の如し

論議の餘地なし斯業向上發展を期せらるゝ諸氏は斯方法を實行せらるゝにあり

説明書は御申越次第進呈

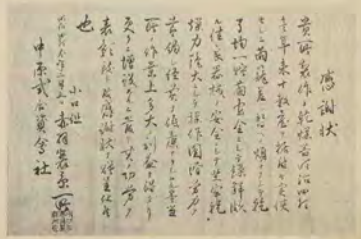
賞狀

今才器械力之進歩ニ與リ工其用ヲ利ス秋當ニ風潮ニ製絲器械發明既ニ著ス中原式繰糸器械殊ニ發明ス大當時ヲ期ス好大利源ヲ開ク時時將ニ其事業ヲ拡張ス以期ス國益ヲ多ク數年ニ及ヒ其間之ニ種種ノ困難ヲ來ス然ルニ今日ニ至リ大發ヲ得ル事ヲ得ル所ノ者ハ其ノ成績ヲ表ス也

明治三十五年六月

内国勧業博覽會繰糸器械場

中原式合資會社


感謝狀

貴社繰糸器械ハ既ニ數年ノ試驗ヲ經テ其成績ヲ表シ其ノ長所ヲ發揮シ其ノ利益ヲ與ヘタルコト尚ホ新ナリ殊ニ本年ノ如キ繭價ノ騰貴ニ際シ其ノ利益ヲ大ニ多ク其ノ成績ヲ表シ其ノ長所ヲ發揮シ其ノ利益ヲ與ヘタルコト尚ホ新ナリ殊ニ本年ノ如キ繭價ノ騰貴ニ際シ其ノ利益ヲ大ニ多ク其ノ成績ヲ表シ其ノ長所ヲ發揮シ其ノ利益ヲ與ヘタルコト尚ホ新ナリ

中原式合資會社

東京市本所區御石御門町三十四番地

中原式合資會社

電話混花二二二六（電略ナカ）

（振替貯金口座壹六五〇四番）

御病中に尚恐事を軫念せさせ給ふ

東宮妃殿下久敷湘南の地に御病軀を養はせ給ふ本會同人憂々天を仰き地に俯して御平癒を祈り奉りたるに其祈願空しからず頃者御全快に渡らせ給ふ由拜聞す同人等茲に漸く愁眉を開きて謹んで之を賀ひ奉る

夫れ殿下の斯業に御心を寄せさせ給ふことの厚き先きに御病患重らせらるゝ内にも尚恐事を忘れさせ給はず特に命じて青山御所内に本春の蠶兒を掃立させ給ふ同人等感泣措く處を知らざるなり

恭しく拜察し奉るに　殿下の御思召は實に我等六千萬の同胞に國富の增進を怠るなと活ける教訓を垂れさせ給へるもの我が十有三萬の會員諸氏豈協心勤力よく斯業の改善發達を圖り以て　殿下の御思召に應へ奉らすして可ならんや茲に　殿下の御平癒を祝し奉ると共に特に會員諸氏の奮勵を望むと爾云

大日本蠶絲會報　第貳百參拾貳號

目次

論叢

●有毒毋蛾の產卵檢査　農學士　林驛作

●印度のモンスーンと絲價高低率　長崎縣蠶業主任　古賀次四郎

●蠶室の乾燥換氣及加溫裝置に就て　前代議士　鈴木藤三郎

●蠶の血液及背脈管の話　農學士　廣瀨次郎

●蠶種貯藏の場所に就て（佛文）　農學士　石渡繁胤

●女子教育と蠶業　設樂社蠶業學校教頭　藤島盈文　二二―二七

集芳

●所感の一二三　本會編輯主任　加藤知正

●蠶兒の强弱鑑定法　特別會員　後閑源助

演壇

●世界蠶絲業の大勢を論じて本邦蠶絲業の將來に及ぶ　伯爵　大隈重信　二八―三一

叩門

●衛生上より見たる製絲工場　農商務技師　野田忠廣氏談

●桑樹の輪栽法を勸む　貴族院議員　若尾幾造氏談

●五齡蠶の飼育に就て　蠶業講習所技師　土屋泰氏談　三二―四一

建響

●朝鮮の蠶業（二）　在朝鮮通信委員　戶塚巳之助　四一―四七

●伊太利國撚絲業及紡績組絲業

●佛國組織物輸出入に關する總統計

●優等賞の光榮を擔へる淺濱堂製絲會社

●榮譽賞の光榮を擔へる佐々木彦五郎君

說林　南嶽

●蠶絲業奬勵の終局問題　南嶽　五二―五四

通信　都是製絲株式會社長　波多野鶴吉

●渡歐第一回の書信　五四―五六

實驗談　本會理事　吉池慶正

●桑の介殼蟲驅除新法　五六―五八

●網を使用して分泊を行ふの便法　特別會員　中村端

●改良上簇法に就て　通常會員　坂入勇

帝國議會　通常會員　河野高之助　五九―七二

●蠶絲業法案　五九―七二

絲況　七三―七六

●横濱市場●紐育市場●里昂市場

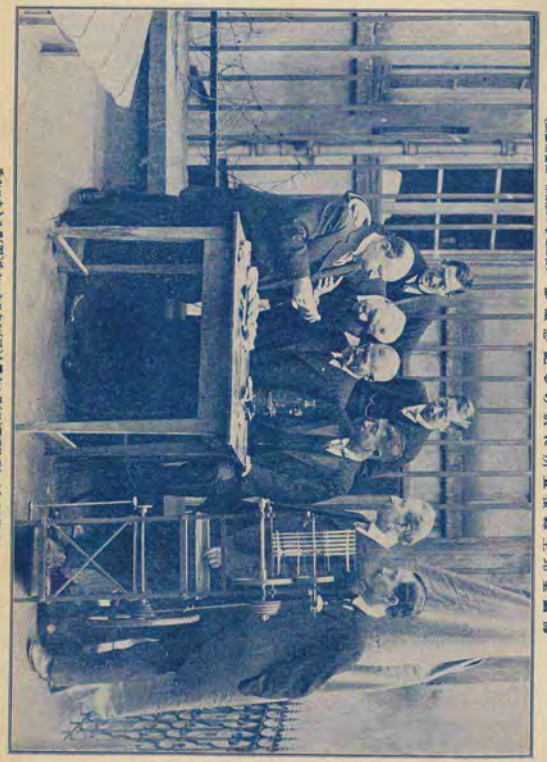
會務錄事　七七―七九

●支會の設置及支會職員の囑託＝學藝委員の囑託＝奬勵委員の囑託＝本會職員の出張＝各支會の品評會開催＝今野福島支會副會長の訃

蠶桑雜觀　七九―八八

●東京御所の御養蠶＝上田蠶絲專門學校入學試驗問題＝今春の蠶況＝生絲の初荷（三）＝米國の生絲賀詞（八）＝群馬縣の霜害（六）＝宮城縣の視察（二十）＝長野縣の霜害（三十）＝蠶絲業施設の完備（四十）＝全國生絲檢査（一）＝原蠶種製造所官製（三）＝外國蠶種輸入其他の認可（二十）＝府縣蠶絲業主任官會議（八十五）

●文藝●四月中の蠶界小誌●蠶海消息●新刊紹介



（開業式當日—市長以下の參觀者群）　蠶業公園とは名ばかりの荒廢地

Photographie commemorative a la Condition des Soies de Lyon.

聊か本會の誇るべき事業

本會之を憂ふる久し、多年企劃し始めて技に完全なる智識の寶庫を提供し而も破天荒の廉價を以て時代の要求と缺陷とを補はんとす眞摯は如上の講師氏名と實質に就て見よ

時勢の要求と時代の缺陷は完全なる蠶業教育の普及と蠶業教育の整備也不完全にして而も價格の不廉なるは時代の要求に合格せず…世に講義ありと雖も誠し吾意を得たるもの絶てあるなし

國家の向上國民致富の要素

講習生募集

愛なるすかれる　入學の最好機　再びすたれる來

專門大家博士學士

蠶業通論

東京蠶業講習所技師　農學士　本多岩次郎先生
東京蠶業講習所長　農學士　星泰治先生
東京蠶業講習所技師　農學士　横田長太郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　荒木武雄先生

桑園法

東京蠶業講習所技師　農學士　辻鶴太郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　石川弘先生
東京蠶業講習所技師　農學士　外山亀太郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　佐々木忠次郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　林彦三郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　石川一郎先生

桑樹栽培法

東京蠶業講習所技師　農學士　見本二十四先生

蠶體生理論

東京帝國大學教授　農學士　要圀先生

蠶病論及消毒法

東京帝國大學教授　農學士　要圀先生

顯微鏡使用法製絲

東京蠶業講習所技師　農學士　今西直次郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　田村則次郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　坂本繁先生
東京蠶業講習所技師　農學士　針塚渡太郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　横井時敬先生
東京蠶業講習所技師　農學士　小林房次郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　大工原銀太郎先生
東京蠶業講習所技師　農學士　佐藤喜子先生
東京蠶業講習所技師　農學士　喜多見喜子女史

二十四名講述

蠶業經濟學

東京帝國大學教授　農學士　中島信子女史

蠶業法規

東京帝國大學教授　農學士　石井泰次郎先生

蠶業整理法

東京蠶業講習所長　農學士　田中義麿先生

蠶業經濟學

東京帝國大學教授　農學士　神田孝平先生

蠶種生産檢査法

東京蠶業講習所技師　農學士　川島勝次郎先生

蠶種檢査所技師

東京蠶業講習所技師　農學士　石井一郎先生

蠶學

東京帝國大學教授　農學士　石居一郎先生

蠶學試驗技師

Portraits de Messieurs Ota et Sasaki, décorés du grand prix à l'occasion
du Concours de notre succursale de Yamaguchi.

本會山口支會品評會に於て優等賞の光榮を擔はたれる太田佐々木二氏の肖像

後藤愛製鉄株式會社太田藏鑑君

佐々木産五郎君

Rebut de l'inauguration du monument commémoratif du feu Monsieur G. Motomiyagi, qui a eu lieu le 3 avril dernier.

本國月三日に擧行されたる故法學士功紀氏作成碑式の光榮

大日本蠶絲會報　第貳百參拾貳號

論叢

有毒母蛾の產卵檢査

學藝委員
農學士　林驛作

▲微粒子の發見と檢査法の創案

蠶卵内に微粒子の存在することを初めて發見したるは西曆千八百五十七年（今より五十四年前）伊太利人オシモ氏である。其以前に於ては既にレーベルト氏の如き、蠶兒の體内諸部に寄生せる狀態に就きて大分調査したものがあるが、未だ嘗て卵内に微粒子の存することを證明した者はなかつたのである。オシモ氏の發見は實に學問上より見るも、將た實益上よりするも、非常に重要のものである。即ち其後早速ゲキタジニイ氏カントニイ氏の如き、オシモ氏の檢査法によりて蠶種の善惡を區別せんと試むる者を出したのである。コルナリア氏は千八百六十年ゲキタジニイ氏と共に蠶種の檢査法を創案した是れ後世コルナリア氏卵粒檢査法として稱用せらるゝものである、後千八百七十年佛蘭西人パストール氏は微粒病の研究を行ひ、之が後防法として母蛾と其產卵とを對照して保存し、母蛾の顯微鏡檢査を行ひ有毒のものを廢棄する方法を發明した、是れ即ちパストール氏小家製種法であつて、實に現今本邦に於て行はるゝ柾製蠶種の元祖である。

▲有毒母蛾の產卵必らずしも有毒ならず

爾來蠶種の善惡は主として母蛾檢査、若くは卵粒檢査の應

用によりて選定せられて居る、現に本邦の蠶病豫防法は此の基礎の上に編成せられて居るのである。而して此の母蛾檢査なるものは母蛾を檢査して有毒であれば、其產卵も有毒である、之に反して母蛾が無毒であれば、其產卵も無毒であると判定するものであつて一寸見れば何にも精確なる方法である如く見るが、事實は決して斯の如く單純の者ではない、何となれば有毒母蛾の產卵必ずしも有毒ならず、無毒母蛾の產卵必ずしも無毒ならざる場合があるからである。此關係は今更に事新らしく說述するまでもなく、既にパストール氏の、詳論せられたところである。同氏の實驗に依へば有毒母蛾の產卵は、必ずしも、又有毒ならず場合に於ても其の有毒の程度に至りては大に差異あるものであるのみならず同一の有毒蠶種にても、之を檢査する時期の早晚によりて有毒步合に大差がある。即ち其一例を擧ぐれば、有毒母蛾の產卵を八月末に檢査したものは產卵百粒中三十三有毒であつた、翌春孵化發生前の卵粒を檢査せしものは百粒中七十有毒であつた、更に其卵の孵化發生せる蛾蠶に就て檢査せしものは百頭中七十乃至九十五の多數であつた、但右は二十乃至三十の卵又は蛾蠶を鏡檢して百分比例を以て示したものである、次に無毒蛾の產卵には其の內部に微粒子を存することはなきも、卵の外面に之れを附着して存することがある。

▲有毒母蛾檢査の實績

余は右の關係に就きて更に研究を試みんがために、先づ第一に有毒母蛾の產卵せる蠶種を採り一粒宛全部鏡檢して微粒子の有無を精査し、同時に卵粒の形狀の大小を區別して三區に分ち檢査を爲し、有毒卵は何れにも屬するものに多きやを檢査するとにしたる、而して此檢査を採るとは昨年の秋季に於て工藤文太郎氏と共に行ふたものである、檢査の實績は次の通りである。

一、小石丸一蛾分中

	大形卵	中形卵	小形卵	合計
檢査卵數	三六	一〇四	四八	一八八
有毒卵數	〇	五	七	一二
有毒步合%	〇	四・八	一〇・四	六・三

二、小石丸二蛾分中

	大形卵	中形卵	小形卵	合計
檢査卵數	五八	一一一	三九	二〇九
有毒卵數	一一	三三	九	四四
有毒步合%	二〇・六	二〇・五	二三・〇	二一・〇

三、小石丸三蛾分中

	大形卵	中形卵	小形卵	合計
檢査卵數	八七	二五〇	一二五	四五二

四、小石丸一蛾分中

	大形卵	中形卵	小形卵	合計
檢査卵數	一一	一一一	一一	二三
有毒卵數	一	三一	二・七	六
有毒步合%	一・六	二七・〇	一八・二	二六・〇

以上の成績を總括して見れば左の如くである。

	大形卵	中形卵	小形卵	合計
檢査卵數	二四五	五九一	二七六	九八二
有毒卵數	一四	三〇	一七	六一
有毒步合%	五・七	五・三	六・二	六・二

▲檢鏡の時期を異にすれば病毒步合を異にす

是に由て觀れば有毒母蛾の產卵にても實際卵內に微粒子を認るものもあるのである。尤も母蛾の能力よりして其の差違大なれば決して一定なる結果を得ぬ、而して有毒卵の大形狀の大小に就ては絕對的の判定は出來ぬ、大體上より見れば小形卵の方に幾分多き傾きがあると言ふよりも、併し、前年來の實驗に據れば冬期に於て卵粒檢査を行ひ易く、微粒子を認め得るものは其の母蛾は著しき有毒なりしを知るに難からぬのである。而して蠶種は冬期中檢査するよりも春期催青後に至りて檢査する方病毒を認め易く、從て同樣の蠶種にても檢査の時期を異にするによりて其の病毒步合を異にするは實にパストール氏の實驗せられたところに符合する、故に卵粒檢査は固より不精確なる病毒鑑定法なるは勿論である。即ち卵粒檢査に於て認むる微粒子が少ないからとて決して安心してはならぬ、其の理由は前陳の如く解化前の蛾にて有毒卵を混合せる病毒步合を知り難きのみならず、尚例へ少數の微粒子を含有する故に解化前に於て有毒卵より發生せる蠶種は其の影響を恐るべきである、其れは有毒卵より發生せる蠶種は其の排出する糞中には無數の微粒子を含有する故に解化前に於て有毒卵より發生せる蠶種は其の糞中に微粒子を排出するものであるが、試に解化前に於て有毒卵の蛾を採り其の小部分を鏡檢するときは實に無數の微粒子を存するのである、之を見ると知れる如く蠶種は完全無毒でなければならないことが知られる。然るに世間には往々蠶種を多少病毒があるも同上の理由に基き敢て無關係なりとして、今日に至るまで之れを用ひて居る人があるようだが其は年の氣候が至極良好で蠶の發育に適せる時には或は微粒子の蠶が多少混合して居るも大害を招くことなきも、年が不順なる時に或は微粒子の蠶が多數混合して居るときは病毒が悪しき場合に必ず害を免れぬものである。故に前に得ぬとかいふ場合に於ては、又は同一の蠶種にても多少病毒の如き實際卵內に包含する微粒子は少なくないものである、故に前記の如き實際卵內に包含する微粒子は決して少なくない、斯の如き蠶種は勿論避け度ならぬ。

新絲の初荷

去四月二十一日蘇和製絲共同より新絲の見本一括な原合資會社に出荷上たりといふが之れ今回度生絲の率りてあちら所にて見料の調は大島の產であるさうな

印度のモンスーンと絲價高低率

二十六片—九百六十圓—一片—五十圓—
絲價の變動—銀塊相場—印度のモンスーン

通常會員
長崎縣蠶業主任　古賀次四郎

▲緒言

神ならぬ凡人が絲價の變化を正確に豫知することは絶對に不可能である。假に之れを豫知することが出來るものとすれば、それは之れを爲し得たる人は直ちに大富豪となる取引所に於ては、あるまい、吾輩も嘗てあざる程に絲價の變動の豫知し得ようが無かった。然れども之れは唯絶對に正確に豫知することは、吾輩の思はる、出來ない迄で大概の想像は爲し得られる程度に豫知することは此數年前より絲價の豫想を爲して新聞雜誌等にて公表したことが數度あるが、偶然に的中して居る。

吾輩が斯樣なことを論ずると如何にも架空の域を爲す樣だけれど決してそうではない、之れには確かな論據がある。

▲研究の方面

生絲相場が銀塊相場と關係あることは何人も認めて既に知らるゝことであるが、銀塊相場の變動を究知することは容易の業ではない、即ち歐米の金融とも關係があるし、銀塊の生産狀況も關聯する

「モンスーン」の良否は何人も意して銀塊相場の變動を豫想し惹て生絲相場の變化を逸想することが出來る。

▲最近絲價變動の徑路

二十世紀に至りてより世界の一部分に於ける政治上、若くは商業上其他般の出來事が直ちに世界に影響を及ぼし變化を來すの有るや、殊に經濟上に關しては最も迅速に而して著しく影響する樣になった。例へば三七八年戰役の際、日本が數億の外債を英國に起し、倫敦金融界を動搖し、延いては世界大都市の金融界にも多少の影響を與へた、又彼當時日露兩國は倫敦孟買の兩市場に於て巨額の銀塊を買入れ、貴金屬を世界の都市より桑港に集積した、中に於ても孟買は一大貯蓄場として之れを買入れ、其結果支那人の購買力は非常に增大し、一面日露の戰爭に基ける人の懷を肥やしたが

▲銀塊相場と生絲相場との關係

銀塊相場の高低は何故に絲價に影響すべきか云ふまでもなく日本は金貨國である、支那は銀貨國である、然るに世界に生絲を供給する主なる國は日本及び支那である、其額は四十年中に於ける輸出額が支那は六百二十萬基、日本は八百四十萬基であつて、共に世界生絲市場の競爭者である、夫れで銀塊が安ければ支那は生絲は安くなり寸とも貨幣が安くなつたと云ふ形、其支那と競爭的に賣らねばならぬので、日本は貨幣は安くなり寸とも生絲が低落したと云ふ支那が金貨本位にならない限り、此の關係はどうしても離れることは出來ない、此度の四國借款は其の主なる目的は幣制整理をなすそうだけれども、夫れは唯銀貨の整理をするまで、金貨本位に迄は及ぼさないそうだ。

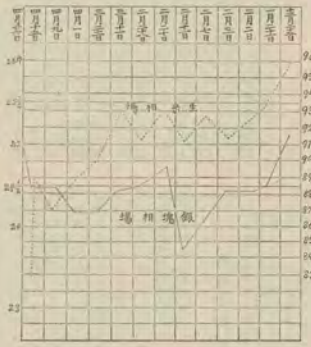
▲銀塊相場に對する絲價高低標準表

最近十年間に於ける銀塊相場平均九百六十圓である、其間最も高い相場は銀塊三十二片生絲一千二百六十圓である、夫れに此の間の比例を取つて見ると、銀塊一片に付き絲價五十圓高低率となつて居る、即ち銀塊二十六片生絲九百六十圓を基礎として上下銀塊一片を高低する毎に絲價五十圓を高低するとすれば次の如き標準表が出來る。

銀塊	絲價
32片	1,260圓
31	1,210
30	1,160
29	1,110
28	1,060
27	1,010
26	960
25	910
24	860
23	810
22	760

▲相場罫線學上より見たる最近の絲價

昨年の末頃より久しく二十四片臺にありし銀塊が突然二十六片に暴騰した其際生絲は八百四五十圓であつたが、吾輩は長崎市發行東洋日の出新聞に絲價は百圓以上騰にあるとを發表したが、見る見る九百八九十圓に暴騰した、然るに其際銀塊は二十五片、内外に落ちたが生絲相場は依然九百八九十圓の相場を保つたので京濱地方の新聞紙は絲價千圓を拔く日も近からんと騒ぎ立てたが、其後銀塊相場は驟く抜ち合つて居るが絲價は四月一日十六日本紙記事起草の當時八百三十圓である、銀塊が二十四片十六分の十五であるから凡そ七十圓下精にある銀塊及び絲價最近の高低罫線表を示せば次の通りである。



▲印度の「モンスーン」と絲價との關係

銀塊相場と絲價の關係は說いた、夫れで銀塊相場の變動を豫知することが出來たならば生絲相場の變化は凡そ想ふることが出來る銀塊相場の變動は生產地たる支那、墨西哥の生產狀況及び消費地たる支那、印度の農作物の豐凶又は戰爭の如き又は投機者の思惑手段によりて影響を及ぼすのであるが其の大原因は印度の「モンスーン」の良否如何である、モンスーンとは印度に於て毎年六月下旬より九月中旬迄約三ケ月間に亙りて我國の梅雨季の如き降雨がある而して印度の農作物は全く其の降雨の爲に繁殖するので、此降雨の多少如何は直接農作の豐凶を支配する程に大事である、農作の豐凶は從つて其の銀塊相場を高低ならし

しむる大原因となる、即ち此の雨季を指してモンスーンと云ふ。

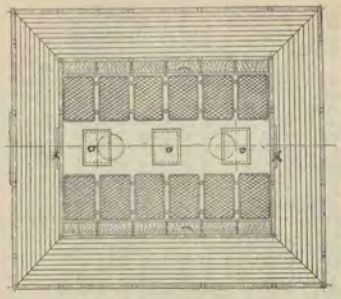
如何なる理由により印度のモンスーンが銀塊相場と大關係あるかと云ふに凡そ印度の重要物產は棉花及び米穀である、人口の必要物產を輸入するから正金銀の流出するに反して、輸入されたる銀貨は內地產物を奪ひ、又は內地產物を製作する人の掘出す

養蠶室乾燥換氣加温装置に就て

養蠶室乾燥換氣加温装置の説明

本装置の目的

本装置は主として従来一般に養蠶家の使用しつゝある現在の蠶室かして最も費用少なく室内に收其し得るものにして其目的とする要件は常に新鮮なる空氣の流通するほか蠶蟻の喪葬と室の四隅に溜る汚濁空氣の新陳代謝は間斷なく行はゝと又温度の昇降は自由にして上下左右一樣平均に保ち飼育にて蠶兒を健全に育せしめ上蔟期に於ては若し降雨其他不順ありと雖も室内は常に適宜の温度と乾濕適當の空氣流通を任意に調整し得て理想的に養蠶の効果を收得するにあり



本装置の特長

一室内は常に新鮮なる空氣の各蠶座の表裏四隅に亙る迄一樣平均に新陳代謝すること

二温度は任意自在に加減の出來得ると上下左右悉く平均を保つ故に壁ヶ蠶座の差符等の手數なき者くこと

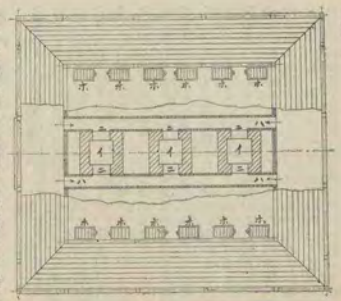
三乾燥若くは天候不良の候と雖も室内は常に所望の氣温を保ち最も蠶兒衛生的の装置にして感性頗る敏捷る等のことなきこと

四装置は極めて簡易にして費用最も少なく且つ室内には強風より蠶座の數を増加し得ること

五換氣窓等に して綾女子と雖も為し得らゝこと

構造詳説

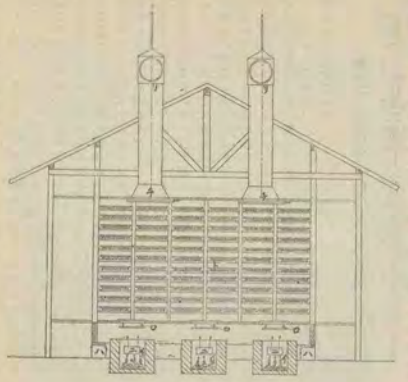
(イ)は火鑪
(ロ)は燃料壺
給口
(ハ)は給氣管
(ニ)は給氣口
(ホ)は給氣部
(ヘ)は煙氣板
(ト)は蠶床の間隔
(チ)は排氣筒
(リ)は排氣筒
(ヌ)は出入口



蠶室の構造

は普通にして圖に示すものは二間半に三間半高さ十尺と假定したるものにて間仕切は床下から設け床下の間隔を土壁若くは板張を以て密閉し室の一方若くは兩方に出入口を設け仕切側を壁或は板張若くは障子を以てする積なりとす然れ共天井、床、床下の周圍、室の兩側等板を用ゆるときは合せ目は紙片を以て幾く目張なし外氣の出入を防ぐ為すべくば床下に設けたる三個の火鑪にして土石或は煉瓦を以て構造し未だ以て火熱を發せしたゝかば火鑪の直上の床に設けた

る燃料壺始日にして此處より木炭か火鑪に給すべく床下なる火鑪に沿ふて設けたる二路の給氣間にして土管若くは木板を以て造り開端より空氣を送入するに便す(ハ)は給氣管より火鑪内に空氣の送入する給氣口にして火鑪の兩側に適宜の次

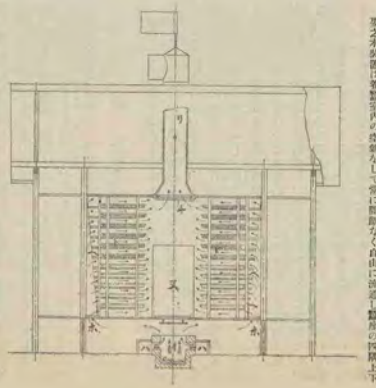


れば氣温の温度は自由に調節することを得而して(ヘ)なる排氣筒の下端は天井に密着して上端は屋根の棟に突出する為以て室外空氣流動を防め室内氣流に少しも障害を與へず室内を常に一樣平均に室内と室外に空氣を不斷に排出するものとす

第之本装置は養蠶室内の空氣かして常に間斷なく自由に流通し蠶座の四隅上下共に一樣平均の氣流及温度を保つと同時に室内の乾濕常に適度に調整することを得而して(チ)なる排氣筒の下端は天井に密着して上端は屋根の棟に突出する為以て室外空氣流動を防め室内氣流に少しも障害を與へず室内を常に一樣平均に室内と室外に空氣を不斷に排出するものとす

第之本装置は養蠶室内の空氣かして常に間斷なく自由に流通し蠶座の四隅上下共に一樣平均の氣流及温度を保つと同時に室内の乾濕常に適度に調整することを得而して(チ)なる排氣筒の下端は天井に密着して上端は屋根の棟に突出する為以て室外空氣流動を防め室内氣流に少しも障害を與へず室内を常に一樣平均に室内と室外に空氣を不斷に排出するものとす

第之本装置は養蠶室内の空氣かして常に間斷なく自由に流通し蠶座の四隅上下共に一樣平均の氣流及温度を保つと同時に室内の乾濕常に適度に調整することを得而して(チ)なる排氣筒の下端は天井に密着して上端は屋根の棟に突出する為以て室外空氣流動を防め室内氣流に少しも障害を與へず室内を常に一樣平均に室内と室外に空氣を不斷に排出するものとす



蠶室の乾燥換氣及加温装置に就て

に達すべし、其製絲家が工費を節して功程を多くし、市場に優越の地位を博するに至ては國利を實に測り知るべからざらんと雖も、而も其能力の有無は不良な氣象の爲に約七千萬圓の損害を被むりつゝあるなり、然るに我國は伊太利及び支那に比して温氣頗る多く蠶絲國として天然の事情は遙かに伊太利及び支那の下位にあり飼育其他彼に比して困難せざるべからず、彼の蠶種は絲一目的を達するに能はざるのみならず、到底二大蠶絲國を凌駕するを得ざるべし、近時上記其他の問題の喜々たるか故あるなり。

氣象の爲に受くる處の損害の如く大にして之を調節して良好なる飼育室と爲すの利益も亦斯の如く大なりとせば蠶室内に或装置を施こし、婦女子にも自由に之を調節せしむるは刻下の急務に非ずや、之れ余が此發明を公にして我蠶業界に害與する所以なり。

▲第二章　現今の保温換氣装置

我國の大氣は常に温和しゝ之に高温加はる時は温熱となり、冷氣に變はるゝ時は冷温となりて蠶に大害を與ふることは一般養蠶家の知る處にして從來之を除去せんが爲に蠶室の構造、養蠶室は勿論居宅換氣装置の設置等識者の間に研究せられ、養蠶用蠶室に至る迄て何等かの設備を見ざるなし、而も其能力の有無は其製絲家が工費を節して功程を多くし、市場に優越の地位を博するに至ては國利實に測り知るべからざらんと雖も、而も其能力の有無は不良な氣象の爲に約七千萬圓の損害を被むりつゝあるなり、然るに我國は伊太利及び支那に比して温氣頗る多く蠶絲國として天然の事情は遙かに伊太利及び支那の下位にあり飼育其他彼に比して困難せざるべからず、彼の蠶種は絲一目的を達するに能はざるのみならず、到底二大蠶絲國を凌駕するを得ざるべし、近時上記其他の問題の喜々たるか故あるなり。

氣象の爲に受くる處の損害の如く大にして之を調節して良好なる飼育室と爲すの利益も亦斯の如く大なりとせば蠶室内に或装置を施こし、婦女子にも自由に之を調節せしむるは刻下の急務に非ずや、之れ余が此發明を公にして我蠶業界に害與する所以なり。

第一項　火爐及暖爐

蠶室内に所期の温度を保たしめ、又排温の目的に利用せんが爲に火爐を設け、或は暖爐を設置し、其温度を蠶室内上下左右に平均ならしむる装置として天井に一個若くは五個の換氣窓を設く、此改備は一見有効なるが如しと雖も、實際に於ては安樂願る多かるべし、即ち火爐たると暖爐たるとを問はず、之より放散する處の温熱は直に上部に向ふして温熱を上部に吸引するの具と爲るに過ぎず、温熱を上下左右に放散せしむるの目的を達する能はざるものなり、試みに一例に於ける蠶箔の位地を換ゆることなく、數日間飼育する時は上部は最も進み、又火爐に近き部分の發育は大に遅るべし、之れ現時の保温装置が不完全なる明證にして飼育者が日に一二回宛蠶箔を上下左右に挿換を爲すは是に裏書するものと曰ふべきのみ、凡そ

斯の如き保温装置は上述の缺點あるに拘らず用火の方法宜しきを得ざれば蠶兒に害を與ふるものなるが思ふに蠶業家が戾火を用ふる場合に於て種々なる注意を爲すは彼害の大なる歩合少のみ、上下左右温度を平均に保つが如きは到底期すべからざるなり。

第二項　天窓及び氣窓

窓氣の開閉を恐れ新鮮なる空氣を蠶室内に導かんが爲に屋根の上には天窓を設け、天井は鈎代に張と爲し、又は網代に張と爲し、倘氣窓を設く其用途や周到なりと曰ふべし、然れども現時の設備を以てして完全に其目的を達せらるべきやと云ふに遺憾の點多しと雖も否定せざる可からず、余の觀察したる處によれば天窓には速接式と單獨式との二種あり、而して此優劣を論ずる時は單獨式（此窓は然開放せられある以て兩式共に其効力の大ならざるは一なり、天井に設けられる氣窓は其有効なるも、天井の構造全般開放的なるなりと雖も、天井の構造全般開放的なるを以て風力若くは強大なる場合に於ては却て其速變する處と爲るべし、今假りに強温なる南風吹き來るとせんか戶障子を閉ぢざれば室内に入り之を閉づれば閉ぢずべし、之を防がんが爲に天窓氣窓を開けば上より逆變す、斯の如くんば天窓も氣窓も非常なる合に於ては其効を爲さずと曰はざるべからず、且夫れ温氣を乾かすには新鮮なる空氣を要すること論なき處、なるが彼の恐るべき温熱が此氣窓又は天窓の開閉によりて防止せらるべきや火力を用ひんには外部温熱に高し、寧ろ之れ火を防ぐに油を以てするものに似たり。

京都府北桑田郡蠶種製造所組織同盟者一同　紀念撮影

第三章　結論

現今の保温換氣装置は何れも完全なる理想に遠ざかること甚だし、然らば理想的の装置とは如何なる條件を具備するものなりやと言ふに大約左の如きものなるべし。

一、常に新鮮なる空氣の流通する事、

二、蠶室の表裏室の四隅に至る迄空氣の新陳代謝行はること、

三、温度の昇降自由にして想性の瓦斯を發散せず、且其温度は上下左右悉く平均に保たるゝこと、

四、飼育若くは上蔟等格別なる時期に於て温度乾湿換氣等自由且平易に其目的を達せしめ得ること、

五、装置に多大の費用を要せざること。

五、婦女子にも繰糸し得らるゝこと。

若し果して斯る裝置にして發明されんには現今の飼育手續よりも一層簡易となるべく又同一室内に於ける蠶兒飼育數は少なくとも、其五倍を增すべし、若し夫れ之によりて蠶兒は健康に發育し繭其他完全に行はるゝに至らば小は養蠶家を

蠶の血液及背脈管の話（承前）

學藝委員
農學士　廣瀨次郎

益し大は國家を利する莫大なるものあらん。玆に於て余は前記の五要項に合したる保溫換氣裝置を發明して之を蠶業界に寄與せんとし、今や其成案を得たり、大方識者の高評を得ば世幸り余の幸とのみ曰はんや。

三背脈管の解剖

背脈管は蠶體の背面に近く、皮膚の直下にあるから、脈搏が外面に現はれて觀ゆる、蛾でも靜かに表面の鱗毛を取除かば微かに之を認められる、蠶兒を解剖すれば第一圖の如く此れが頭部から第十一環節迄、即ち尾角の在る所まで、背皮の下に在りて、其側には第一圖の如くに左右の皮膚から出て、背脈管に聯絡して居るから、細狀筋、扇狀筋或は羽狀筋と云ふ名があります、蠶兒の脈搏が容易く見ゆるは此筋肉が交代に收縮したり、又伸張するから前方には羽狀筋なく、唯僅かばかり兩側から附いて居るものがあります。

背脈管は細き肉質の管で後端は全く閉ぢられて居るから、血液は其間に於て動に依り前端に進して、頭部の神經球即ち腦球と、食道の間を過ぎ、前端の開口から注ぎ出されて、體腔中を普く流動するのである、高等等物では動脈と云ふ血管が總ての器官や筋肉の內部まで入込み、其末は頗る細き管に分られる、此が再び靜脈に還る、靜脈管は第五環節より後方の部分即ち羽狀筋を有する所は高等動物の大動脈と同樣であります、又其の下顎や下唇等にも血液の流通を圓滑にする隔膜があります、體腔內に於ては背脈と云ふべき判然たる血管は決して在りませぬ、夫れ故に血液は背脈の前方から注ぎ出されたる後は、種々の器官の間隙や筋肉又は脂肪組織の表面を流れつゝ、再び背脈管の兩側に開ける七對の小さき裂孔から管內に戻る、此孔を瓣孔と云ふて蠶兒には七對に止らず、第三環節から第十一節まで各環節毎に一對づゝ、即ち九對あると云ふ說もある、甚だしきは十一對だと云ふ、蛾では何對の孔あるや判らぬが少くも七對あるは確である。

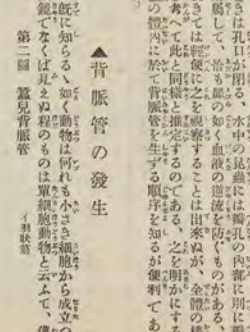
背脈管は一本の管であります、詳しく視れば前端から後端まで太さは一樣ならずして、數箇所を繫き合せた如くに細太がある、或は之を以て高等動物の心臟を縱に列べたものと考へられます、心臟の心室や心耳の境には瓣膜があつて血液の逆流を防ぐも、背脈管は蠶體の環節毎に細太の差別あるのみにして、其間を區劃すべき瓣膜を備へて居らぬ、然しながら後方が窄りて居るから、血液は規則正しき鼓動に依りて前方に押し流さるゝ許りで、跡戻りは致しませぬ。

第一圖　蠶兒內景

イ 背脈管　ロ 心室　ハ 瓣膜　ニ 腦球　ホ 食道神經球　ヘ 絲組　ト 腎臟管　チ 生殖器

▲背脈管の發生

水中に棲む昆蟲類には體膜の透明なるものあつて、生きて居る邊で血液の循環を透視することが出來る、背脈管が脆弱でなくば見ゆる程のものは單細胞動物と云ふて、僅かに一個の細胞が即ち一疋の動物と成て居るが、通例人の目に見當る程のものは無數の細胞から出來て在るので、其卵は大小を論ぜず一個の細胞であります、蠶も此例に漏れず其の卵は始め一個の細胞で、其の中に唯一個の核と多量の卵黃を含むばかりですが、此の核が多數に分裂して細胞の集團を作り、



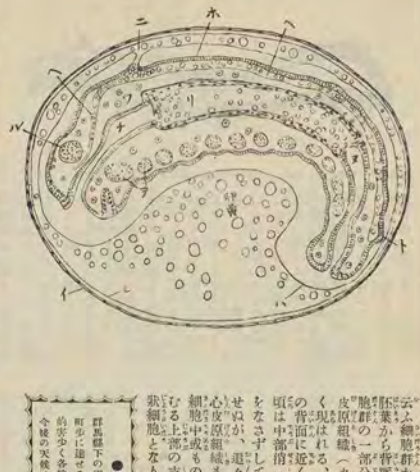
第二圖　蠶兒背脈管　イ 背脈管

既に知らるゝ如く動物は何れも小さき細胞から成立つ、顯微鏡でなくば見ゆる程のものは單細胞動物と云ふて、僅かに

蠶の血統及育蠶學の組

卵内で蠶體を形成する、之を胚子と云ふ、されば產卵後未だ

第三圖　催青期に於ける卵内の胚子


ニ
ホ
ヘ
ハ
ト
ロ
ヲ
ワ
カ
イ
イ
イ

せば、一定の籠庫中に穀高の籠見開陳して間が少く伸はず、一致和合するが如き、冷ゆるも飢ゆるも忍耐して其報酬を忘さず偶が夫婦中は妻夜を別たず、其育法當を得て子女の育て方は無し、勤勉力行はれ、蔡の教育の活資料たらざるは無し、加之飼育し難きが如き、昔富みて、趣味の多き他に其比を見ず、眠起の狀態を見れば、桑葉を中に、隆出し活動する見れば、謹れか其美同情の念を起さざるを得ず、蠶の片隅に、和繭を作りたるを發見せば、謹れか其美不圖蠶架を立て夕立かと疑はるゝ、桑喰ふ音を耳を感ぜざらん、壯蠶時に、夕立かと疑はるゝ、桑喰ふ音を耳にせば、謹れか、時に、和さらん、偶絶快絶、情味は到底門外漢の事業に狂奔して子女が家にあり如何に我儘に保育されつゝあるかの如きは是れ婦人が自己の天職を誤認せざるより來たる文明の一弊害にして、嬌か正の策を講ずべからざるものなり、若し上流の主婦、斯る弊風を一掃して、よく其本分を全ふするに至らば、實に美風を生ぜば、實に美風を生ぜば、實に美風を生ぜ

「十一」蠶絲業は婦女の國家的勞働なり

普通の農事其他の力作業は、柔和なる婦人の遽く男子に及ばざるは勿論にして其勞働に對する細心の如き、男子の半ばにも及ばざるは、當然なるも、獨り蠶絲業は細心なる注意を要する事、妙なる指頭の働きに待つの多し、是れ先天的女子に適せる事業なるの證據にして、其勞働の長所を有し、而かも、我國財力の充實上唯一の國產たる獨特の長所を有して、其勞働の如き、最も、我國財力の充實上唯一の國產に、是れ先天的女子の收得に漏らざる特權なり、故に、我國の婦人は、天下興論の是認するところなり、雲の絕之間より漏れ承はるの處に依れば、我國は、實に、天下の寶庫なるに、國家の如き、最も

所感の二三

本會編輯主任　加藤知正

諸根の子女を離れしかの懇ろ、いつか若輩となつて世はなりの初夏の新世界に入らんとして暮る、詩入でぬない新何と云ふ興が湧く、所感の二三は附ちやのである。

▲天の罪か人の罪か

編者は二月の半過ぎ、官のて後藤遥和が、あゝ東北の情民一と眉倒したた東北の地に遊んだ、主たる用事は宮城支會の高等蠶業講習會に臨席する爲めであつたが、事志から望まれして東等の講師氏を始め其他一騎當千の勇士を網羅して成る蠶業界の權威者達が、悲慘の東北の天地は實に惨憺を極めて居る、水害後の野の光彩に常に時の惨狀を語るが如く展開せられて、聞きしに勝る天の非情に且つ驚き且つ呆るゝの外はなかつた、而して之が善後に關する會合等には、萬障を排して出席せられぬが蠶絲業者達の非情しいかな編者の眼に甚だ多く映らなかつた、編者は不幸にして天の非情に打勝つ可く野に働く東北人の動態を見ることが出來なかつた、あゝ季や未だ早過ぎて、東北人の情は、天の非情に

厄後の所内で例年通り春蠶飼育をも營み得る迄に洪厄を輕からしめたものは全く同所生徒の母校を愛する念が非常の大事に遭つて結成した結果に外ならぬ、而して其の大事の間に處して尚職員と生徒とが一致協力の實を擧げ得たことは誠に賞揚すべき美談であらう、今や全國到る處に學校騒動なるものの絶えざる時に當つて此の美しき愛校心露を見た福者は大に其の意を強うし我が蠶界の爲め、否現下の難敗せる社會の爲めに前途に大なる光明を認めたのである。

▲五指の交弾するは一拳のよく搏つに如かず

編者は我が四民が此の一事に感激して奮起することを望んで止まぬ。

――――――――――――――――――――――――

蠶兒の強弱鑑定法（承前）

特別會員　後閑源助

蠶兒の強弱鑑定法

一健康なる蠶兒は手を以て撫で試むるときは筋肉の働き鋭利なれば隨て神經の知覺も敏なるを以て感能著しく速に物事を知覺するものなれども、虚弱なる蠶兒にありては知覺神經鈍くして感能なきを以て體を短縮せざるものなり。

一健康なる蠶兒は手を以て撫で試むるときは頭を拾げ著しく體の上部を丸くするを以て恰も大白豆に手を觸れるが如き感あるのみなれども、之れに反し虚弱なるときは蠶兒が平臥しあるものなれども平の場所を撫づるが如き感あり、又體軟柔軟なるを以てしつとりとして、常に呪ひ付くの感あるものなり。

一手を以て蠶座を輕く押し試むるときは蠶兒健康なるときは直に頭を拾げて一増活潑に動搖をなすものなれども、虚弱なるときは押されたるまゝにて稚沙に埋もれたるが如くにして速に動搖せざるものなり。

一蠶兒を把り腹部を見るに其色白きものは往弱にして之れに反し少しく黄色を帶びたるものは健全なり。

一蠶兒の足の裏を撫で試むるにざらつくものは健康なりと雖ども滑かなるものは往弱なり。

▲眠蠶の鑑定

一健康なる蠶兒の就眠せる形狀は頭を拾げ胸部を張りて背部に反り弓狀をなし、頭部割合に多きくして恰も離れたるが如くに見へ、恰度之れを「ヤ」と云へ、腹足は紙沙に圓着して就眠す。

一就眠に際し給桑の不足するか、或は裏に失するときは、頭を垂れ、稚沙中に就眠するときは、頭を拾げて一見すると健康なる蠶兒なるが如くなれども、之れに反し給桑充分にして其狀態恰も大白豆を觸れて就眠す。

一虚弱なる蠶兒は頭を垂れて體を長々として就眠せるを以て俗に之れを泥眠と稱し、休眠とも云へり。

一湿気熱気に冒されたる蠶兒の就眠に際し、虚弱に陥りたるときは、俗に之れを病眠と稱し、就眠せる形狀は尾脚と胸足とを拾げ腹足のみ稚沙に固着して就眠す。

一健康なる蠶兒は集合して頭を頻へ俗に之れを蠶寄と稱し、俗に之れを休眠と云へり。

一蠶兒の皮膚緊張して光澤を帶び体の前部が大にして尾部割合に狹小なるは健全なり。

一健康なる蠶兒の就眠せるときは頭部に白色を列然と顯し、體色(櫻色)を呈して鮮明に消ちかなるものなり、之れに反し虚弱なる就眠せる色澤は曇りて冴へず赤錆色を呈し、或は水分を含みて灰褐色を帶びて何となく色澤不良なるものなり。

一頭部比較的小さくして細小し、體色黑味を帶びて光澤なきものは虚弱なり。

一健康なる蠶兒は胸部を伸ばし、枝も馬の首を擡げたるが如き感をなして就眠す、俗に之れを鶴休と云ふ。

▲熟蠶の鑑定

一健全なる蠶兒の熟せし有様は體軀細長くして頭を擡げ、口端を縮して天上を望みて頻に絲を吐かんとして箔の周邊などへ容易に這ひ出でずして、繭を與へらるゝを待ちつゝあるが如し、之れを振み試むるときは體軀堅硬にして鋭きものなり。

一虚弱なる蠶兒の熟せし形體は何となく優柔にして正を得ず老熟せしが如き不活潑なる挙動なり、體軀太りて短く之れを振み試むるときは柔軟にして就ることを鈍きものなり。

一熟蠶の體色にあり、品種によりて異なるものなれば左に之れを述ぶ。

一法廣なる蠶兒の熟せし體は何となく優柔にして正を得ず老熟せしが如き不活潑なる挙動なり、體軀太りて短く之れを振み試むるときは柔軟にして就ることを鈍きものなり。

一熟蠶の體色にあり、品種によりて異なるものなれば左に之れを述ぶ。

青熟系統即ち青熟、小石丸等の種類にありては蛍光の如く健全なる熟蠶として、他を白濁の熟せしが如き色澤を呈せるは不健なり、之に反し白色に失するものは不健なり、赤熟系統即ち赤熟、双青等の種類にありて淡赤褐色即ち櫻色或は薄桃色の色澤を呈せるを健全なる熟蠶とす、之れに反し赤錆び色に呈へざるもの或は濃厚なる赤色を呈せるものは不健なり。

一秋蠶の和眠の形狀は頭部比較的膨大し、尾部細く其形體は恰も糯薯の如きを健全とす。

▲起蠶の鑑定

一健康なる起蠶は體軀太りて頭部を昂起し、胸部を張り出し、尾角を立て尾部を擡げて踏み付けに力あり、口と稱する部分は體より割合に大なり、之れ即ち飼食後に於て大食せんが爲めなり、其弱弱なる形態を稱して鬼起と云ふ。

一虚弱なる起蠶の形體は凡て健康なる起蠶に反對にして體軀細小し、尾部痩小にして細敏少なく口と稱する部分割合に小さく、其の形容は優美なるを以て俗に之れを姫起と云ふ。

一健康なる起蠶は眠今飼食の時期後れ微候に頻すと雖ども悠然として靜座し沒々食を書むるの挙動を為さざるなり之れ虚弱なる起蠶は頭を垂れ、何となく微候に迫りたる狀態を表し、食を書むるの挙動をなすものなり。

一健康なる起蠶の色澤はほんのりと薄赤くして鮮明を含み稍透明の如く冴へて清らかなるのなり。

一起蠶の體色は微細の粉末を多量に附着するものは健康にして其少なきものは不健の兆なり、白色微細の粉末は蛻皮の際舊皮と新皮との間に膨脹液を出して滑にして脱皮を易からしめんが爲めに分泌せし液の結晶して白色微細の粉末を呈せしなり、斯の如く白粉狀を呈するは分泌せる液體中に含有せる蓚酸石灰の結晶せしものにして、前合中營養の供給多きもの即ち健全なるものに多量に附着し法廣蠶にありては少きものなり。

繭沙中に埋れて就眠せしものにありては、蓚酸の化合により就眠に更に白粉を附着せず體色は黄褐色を帶び其性法廣なりとす。

一法廣なる起蠶は體色灰黑色にして濕分を含みたるが如くに見ゆるは虚弱なる起蠶なりとす。

一起蠶の體色は俗に桑葉と稱して最初淡褐色即ち薄鼠色を呈し、漸次體軀の膨大となるに伴ひ、濃度を増して色澤の一際全を健全とす。而るに色澤赤色を呈せるもの(俗に赤錆色)は熱蒸の害を蒙りしもの、或は繭沙中に埋れたるものに多く出て蔟にては起繭多となるの恐れあり、何等の薄鼠色を呈して起出でたるものは、繭沙の温潤せるか、或は空氣の停滯せるが爲にして之又起繭病となるの恐れあり。(完)

中央亞弗利加に於ける天然蠶

黑井勇雄

黑井勇雄會員所より一九四四年黑井博士會及び一九〇〇年巴里萬國博覽會出品せる蘇米亞産繭は初めて中央亞弗利加の天然蠶に就き頗興味を注ぎたる結果を報告せりと云ふ。

黑井博士曰天然蠶とは長く絲を繰り出だすに至れり而しても之を思考するに此の蠶中に多くして其の繭は黄色の黑味を帶びたるものにして、中央亞弗利加の森林

世界蠶絲業の大勢を論じて本邦蠶絲業の將來に及ぶ

伯爵　大隈重信

諸君、今日は殿下の御前で、全國の蠶絲業者諸君に大會を於ける祝辭を述べたいと存じます。全體經綸も無い我輩が今日御案内を受けて、熟練なる蠶絲業者諸君に向つて、何等御話することは無い。殊に遊年斯の如き事業には、餘程隔つて居る爲に、常に注意を致さぬ者が、此大會の諸君の前に祝辭を述べる爲に、大なる意見を述べることは無いのであります。只私には、今日盛んなる蠶絲業を祝すると云ふ外、諸君の參考に供したいと思ふのであります。

▲世界蠶絲の大勢

元來蠶絲業は東洋が根本であつて、多分支那が根本であつたらうと思ふのであります。歐羅巴に傳つたのは大分遲い。今世界で最も高い伊太利の絹絲は、遙に日本よりも後れたものである、多分部馬の傳教師達が支那と交通した賜家のものであらう。それから徒つて佛蘭西南部に移り、小亞細亞迄移り、今日では蠶絲の範圍が大分廣くなりました。支那、日本、伊太利、其他幾多數ふるに堪へぬほどである。佛蘭西は有名なる絹絲の產出地である。是は最早衰運である。工場は地方では全く絹絲の產出を停止して居るのである。又蠶絲業も動もすると年々減ずる傾きを有つて居るのである。又蠶絲業は最早利益の無いものである。凡そ其業に於ける其物に道利益が無ければ、如何に國家が奬勵保護しやうとしても、衰へて來るものである。佛蘭西然り、又伊太利も、今殆んど物價騰貴し、或は蠶絲の價を減じて、伊太利は佛蘭西の運命に近付いて居ることは、最早爭ふべからざる事實である。是に於て世界に於ける蠶絲の大なる統一を有つて居るものは、支那、日本である。御承知の如く、日本の蠶絲業は、大政維新後四十年間に如何なる發達をなしたかと云へば、四十年前は世界生絲の十分の一にも達せぬのである、伊太利の三分の一、支那の六分の一であつたが、今日は殆ど、伊太利は、負け、將支那の勢に追ひつかうと云ふ勢である。今日日本は殆ど世界蠶絲の四分の一以上に達して居るのである。此長足なる進歩は、十五年後には世界の蠶絲の半ばを日本の絲を以て占むるに至るであらう。私は敢て之を疑はない。此時に當つては世界の絹絲の價を横濱に於て制することが出來、里昂も、紐育も、端西も、伊太利の價も横濱に於て制することが出來る。如何となれば數の上に於て、世界の生絲の價を左右する力は、自然日本人に歸すると、斯う思ふのである。そこで數の上に於て日本が勝つと云ふことは、今日まで世界の生絲の進歩、發達及び分量の增す所の比例を以て、疑なく十五年の後には世界の生絲の半ばを制することが出來るのである。支那の絲は一向進まない、全く增さぬと云ふ方である。伊太利、佛蘭西は初めより其進歩が其だ鈍いのである。日本は數の上に於て、必ず世界の半ばを制することが近く來ると思ひます。

▲生絲の輸出と棉花の輸入

然るに日本生絲の仕向品位に於て、如何と云ふに就ては、遺憾ながら世界の絲を支配する力を有たぬと云ふことを、私は斷言するのである。是は製絲家諸君が最も注意すべき大切な點である。それは製絲家諸君ばかりでない、養蠶家其者が大なる注意を拂ふことが必要である。養蠶製絲は贅ちべからざる關係のあるものである。絲其物は論の性質が良くなければ、善良なる絲を製することが出來ぬ。ところが日本の絲は、何となしても今伊太利、佛蘭西の絲に比べると遙に下つて居る。實の上に於て、彈力の上に於て、光澤の上に於て、總ての點に於て遙に下つて居るのである。又日本製絲は餘程發達して居るやうであるが、日本の繭其物の性質が支那の繭に及ばざることは遙に遠いのである。支那の繭は性質が良いから、是から採つた絲は彈力も光澤も良いのである。是に於て農商務大臣も、御居でゝあるが、養蠶家に於ける識論の統一、種紙の統一に於ける識論の起つたのは、こゝに在ること思ふ。不統一は悪い繭を買集めて、それから採つては良い絲は採れない、是は製絲家一人の罪ではないのである。併しながら製絲家は、良い繭を選んで、良い絲を製するのが隨分多いやうである。私は昨年一二箇所の製絲場を見たのである、殊に三河の三龍社と見た、其邊の人で御存じの方は、澤山ありませうが、是は良い絲を採る。どうして良い絲を採るか、絲を捨てるかが上手であるか、さうではない、良い種を選ぶのである。先ず尾張田正名君が御話になつた所の、有名なる横濱の原富太郎君が、富岡に製絲場を有つて居る、此原富太郎君の絲は絲價が驚く程落する時でも、案外に暴落しない。悪い絲と、良い絲との差は四割も差がある、賣る絲で二百圓、若くは四百圓、三百圓と云ふ差が起つたことがある、良い絲は割合に下落しない。

▲殿下の台臨は國家の爲に大に祝すべし

原富太郎君の製絲場で拵へた絲が八百圓に下つた時でも、千二百圓と云ふ値を保つて居ると云ふことである。是は上手に絲を製する爲めであるかさうではない、それも多少あるかも知れぬが、根本は良い繭を選ぶのである。然らば良い繭を選ぶには、其他で拵へた絲を分たねばならぬと、私は存ずるのである。そこで今年所謂一億三千萬圓の繭出高の、銀に二割の價を増せば一億五千萬圓に達する。是は製絲家諸君の御注意一つで決しなければならぬ。私は存ずるのである。又製絲家諸君は多數の農民より知識が低く、然らば其製絲家諸君は、農民に向つて、手段方法として、一方に於ては、一層良い繭を造る相違ないと思ふのである。是に於て養蠶は發達し、且つ改良されると思ふのである。是に於て養蠶と製絲と相俟て進歩すべきものであると云ふことは、一方に於ては、

衛生上より見たる製絲工場

叩門

農商務技師　野田忠廣氏談

編者一日野田技師を内務省の衛生課に訪ひ工場衛生に就て其意見を伺いた其帰日に答さも或は以て我朝鮮人に対する一に見られん為め敢て業業者の一読を乞ふ

▲身體を勞することは外の事業と甚しき差がない

一般の工場に於ては職工の衛生狀態を不良ならしむる原因を調査するに先づ第一が空氣の汚染は職工の呼吸作業又は機械光等に依て生ずる炭酸瓦斯、一酸化炭素及塵埃等が其原因を爲し、第二には工業に伴ふ各種の中毒である、之は毒性を有する瓦斯、蒸氣又は粉塵等であるが、第三には過勞に依る疲憊の障害であるが、其他皮膚病を起し、或は傳染病の障害を來すこともあれば、或は工場内の熱度、温度又は採光の不充分等も大に關係を有して居るのである、而して製絲工業に就ては空氣の汚染に依る健康障害は他の工業たとへば紡績業等の如く甚しくはないが、併し茲に注意すべきは職工の身體の精神の過勞と室内に於ける温熱及温度の關係である而して就中前者は製絲業に於て最も注意を要する問題であると思ふ、人或は製絲工業は割合に身體に勞を掛くることは外の事業と甚しき差がないやうである、何となれば長時間一定の姿勢を取て座業に從事して居るといふことは、ナカ〳〵容易のことではない、殊に仕事の性質として多くの女工は體を前屈する傾きがあるを免れない、長時間座業に從事して體を前屈するときは、第一呼吸を知らず〳〵の間に肺部に壓迫を加へ、從て消化に障害を與へ營養狀態の不良を來たすとなるのである タトへ然らざるも他の業に比較すると身體の運動が乏しいから消化を害し易い傾きのあることは爭はれぬ事實であつて、或は長時間座業の結果血液の循環に不調を來たし、或は咳き腰掛の上に長座する爲に屠々月經の不調又は白帶下其外の子宮病を發する者も尠くないのである。

▲體温の調節を賊ふ

夫れから温熱の關係に於ては釜に向て仕事をして居るのであるから、前の方は熱氣を受け背部は之を受けないので、其影響として體温の調節を賊ふことになるのである、抑も吾人の身體が一日中に製造する熱量は二百萬乃至三百萬「カロリー」で此製造したる熱量を放射と傳導及蒸發の三途によりて失ふのであるが、此熱量の輸出が不平均となる狀態を名げて體温の調節を賊ふといふのである。

夫れから温熱の關係に於ては釜に向て仕事をして居るのであるから、前の方は熱氣を受け背部は之を受けないので、其影響として體温の調節を賊ふことになるのである、抑も吾人の身體が一日中に製造する熱量は二百萬乃至三百萬「カロリー」で此製造したる熱量を放射と傳導及蒸發の三途によりて失ふのであるが、此熱量の輸出が不平均となる狀態を名げて體温の調節を賊ふといふのである。

▲製絲工女の多くは蒼白病に罹る

次に工場に於ける空氣は適當なる濕度を要することである、即ち餘り乾燥したる空氣も餘り濕潤したる空氣も衛生上には大なる影響を與ふるのである、「平常吾人の身體は一日間に製造する熱量の約四分の一を蒸發に依て失ふのであるが水分の他和せられたる空氣中に於ては蒸發といふことが全く止まるから自然體温調節の上に影響するを免れない、體温の經過からいへば七十九乃至八十九の温度が最も適當で、此適當なる濕度が保たれてあれば吾人の健康は立派に維持らるるのである 然るに製絲工場に於て空氣の交換其宜しきを得ざる場合或は管に職工の呼吸其他に依り室内の空氣を汚染する時に在ては又水分の蒸發に伴ふ一種の臭氣を發散して是れ亦空氣を汚染することとなる、加之

▲就業時間を短くせよ

除害の方法として第一に掲を加すべきは就業時間を少くすることである工場法に依れば第三條の二項に依りて比較的輕

微なる程度に於ては、一週間を超へざる範圍に於て、一日に二時間以下、一週に百二十時間以下、一年に百二十日を超へざる範圍に於て日々一時間の延長をも認めらるゝ。

あらうと思へ、一年併法の上に於ては最高の限度を規定したのであつて、日に十四時間乃至十五時間の勞働を爲さしむべしといふのではない、正しを得ぬ場合には延長し得るといふ限度を示したるに過ぎない故に工場主は其工場の永遠の發展と職工の健康とを顧慮して、可成此就業時間を短くすることを必要と思ふのである。

▲時間と工程

歐洲の學者が常に時間と工程との問題に於て唱ふる處は工程は必ずしも時間に正比例すべきものにあらずといふことである、故に近來は成るべく、時を少くして、同じ工程を爲ぐることに勉むる傾向がある現に獨逸の如き女子及び年少職工の就業時間は從來十一時間なりしを昨年は之を十時間に短縮したのである、想ふに十一時間の就業時間を十時間に短縮しても、他の設備經營へ其宜しさを得れば同一の工程を得るのみならず、職工の衛生に障害を與へずして濟むといふことを考へてのことであらう、近く日本に於ける一例を擧げて見れば、大藏省の三田第二煙草製造所に於ては從來十時間なりしを近頃九時間に減じたといふことであるが、聞く處に依れば十時間をも、又絲工程に於ても大なる差なきことを期することは出來はせまいかと推察せらるゝのである又吾々の視察する處に依れば職工に對しては殆ど食事以外に休憩といふものがないやうに見える、加之食事に於ける實況を見るに最後の瞬間に至るまで手早く且つ簡單に濟むか、或は食事を中止して行くといふ殆ど食事以外に休憩なく、食事が濟むか濟まぬに直に工場へ出れ果て職工の賞銀を各自の競爭に委ねる結果であるのである、是らるゝも一日に相當時間の休憩を與へて、彼の心神を爽快ならしめ元氣を回復せしむる事の必要なる感じたなら、當事者宜しく適當的に調和を計り、一定時間の休憩を與へるとの心神が良い、殊に注意を促したは、職工の姿勢である、今日學校衛生に於ては机の高さと腰掛の距離などを切に唱へて居るが、之と同じように當事者は宜しく其邊の事も研究して職工の姿勢を直線狀の際可成崩せしめぬやうにさせたい、尙些細の事のやうではあるが長座する時は、腰部に充血することを免れぬから腰掛などは可成軟かく弾力のあるものを用ひさしむるか、然らざるも軟く溝圓のやうなものを用ひさせて、身體の下部に充血することを避けしめねばならぬ。

▲工場の設備を完全にせよ

第二には工場の設備である、工場は可成廣濶にして職工一人に對する積は少くも十五立方米突可成は二十立方米突を與へ、五十人ならば千立方米突の氣積を與へて如何に少くも七百五十立方米突より下つてはならぬ、尙光線を採ること

桑樹の輪栽法を勸む

本會評議員
前貴族院議員　若尾幾造氏談

本稿第二百二十九號に桑樹輪栽法に關する若尾評議員の意見が出た、ヤー組合が來るわ來るわ數千百通の御分状に怒り狂んで山な露として如何にも公平沒書の注意を引いたから、例るとは時に本會の反響が如何に大であるかを知らるゝ若尾氏からは夫々に其答をせられたる書あるけれども同氏の意見は無心なる貴員に即へたきまゝ掲載し一日機熟なる同氏の商店を唱いて之に關する議論を聞き社に組合するこゝにした

▲何故に桑樹輪栽法を唱導するか

桑園一反歩に對する産繭額は年一年に減少し、且つ同じ産繭でも之を十年前のものに比較すると、其品質甚しく劣り一斗の繭に於ても純量の二十匁や三十匁は進ふのである、之は一體、何が原因となつて居るであらうか、聞ふ迄もなく桑樹の衰廢は根本的原因である、其證據は新場地方の桑園が何れも能く繁茂して地積に對する産繭額の割合多く又其品質も美事であるに反して古桑木場と呼ばる、地方の桑園は概して桑樹の衰弱甚しく、從て、對一反歩の産繭額少くして其切賣赤著しく劣るに居る、之は一反歩に微して明かである、之は去三十七八年に全國桑園の衰滅地へ人を派して蚕國せしめ、工場に在り、工場に於ては矢張蚕室に於ても、蚕室に於ては、蚕氣の交換、光線の射入内部の清潔の保持及職工一人の氣稟等之に準じて設備することが必要である、多くの地方に於て、吾々及同僚の多く實見する所、人口に膾炙する如く一人乃至三人以上の蚕室に於ては

あるとして勢肥盛の新蠶に同一の施肥をしたならば一層の收穫を得らるゝことは無論のことであるから、七年目位迄は盛に肥料を施し、盛に繰返して八年目位には情まず引き抜いて新木とするの業務を希望するのである。

此事を唱道して既に五年の星霜を閲すれども、之を喜んで聞き之を實地に行ふの人甚だ尠かりしは子の私かに遺憾とする處であつたが、本會第二十九號に卓見の一端を洩したるに對して存外多數の反響のあつたのは何より喜ばしいことで、之から見ても世人が如何に桑園問題に若心を寄せうやうになつたかといふことを、察せらるゝと共に子の輪説なるのも必ずや熱心なる當業者の注意を惹くに至るであらうと信ずるのである。

五齡蠶の飼育に就て

學藝委員
蠶業講習所技師　土屋泰氏談

今が五齡蠶飼育の眞最中と思ふから土屋學藝委員の談話を聞いて會員諸君の參考に資することに仕度

▲五齡蠶と絹絲腺

吾人が蠶を飼育するのは絹絲其者が目的である、而して此絹絲は蠶の何齡頃に作らるゝものであるかと云ふ問題に對して或者は斯ういつて居る曰く「絹絲は蠶の各齡に於て作らるゝものである、其證據は繭を截つてみると五層に劃げる、一番の外層が五齡に於て作られたるものであるから最も厚く、絃肌の處が一齡の時にしてあるから最も薄い、と、之は如何にも尤もの說のやうに聞ゆるが、併し繭層を貫ぬく處の絹絲は五齡に於て作らるゝものであること、絹絲腺發達の順序を調べて見ればしやくりこまるゝ、而して此事に關して調査したものがあるから御覽下さい、但し之は蠶百頭に就て調査したものである。

五齡日數	蠶體量	蛹量	繭量	絹絲腺量
一日目	二、二九八	〇、五六	〇、一一	〇、〇一七
二日目	三四、九三	一、二五	〇、一七	〇、〇一七
三日目	五六、一八	三、六〇	一、五三	〇、六三
四日目	七七、四九	七、九二	二、四〇	三、五二
五日目	八五、二五	一一、一八	三、五二	一、五五
六日目	九四、五〇	一一、五五	四、三〇	一七、二五
七日目	一一七、二五	一七、二五	六、九六	二六、五〇
八日目	二六、五〇	二六、五〇		
	八五、八八			

七日目の蠶體量九十六匁餘に達して居るにも拘らず絹絲腺の量は僅に十七匁餘となるに反して繭殼の量は急激に增加して二百二十九號に卓見の一端を洩したるに對して存外多數の反響のあつたのは何より喜ばしいことで、之から見ても世人が如何に桑園問題に若心を寄せうやうになつたかといふことを、察せらるゝと共に子の輪説なるのも必ずや熱心なる當業者の注意を惹くに至るであらうと信ずるのである。

▲五齡蠶と溫度

ソコで先づ第一に注意を要するのは溫度である、五齡中の溫度が高くて滿六日位で上蔟するやうな時には到底絲量の多い繭は得られぬ、故に出來得るならば六十七八度から七十度位に保ちて滿八日は食桑さするやうにしたい、其故は日數と比例するものであつて、食桑日數が桑量といふものは日數と比例するものであつて、食桑日數が短ければ如何に充分に給桑して食桑せしめたる積りでも、結局食桑量が尠いから繭絲分の生成も少い隨つて繭絲腺も充分に發達しない、されば折角苦勞して作り上げた蠶の體內即ち繭の入物に繭を入れなかつたといふ馬鹿氣た結果を見ねばならぬことになるから五齡期の溫度は前述の程度に止めたい、而して高溫に失する恐れのある場合には室內を開放するとか除けを構へるとかして溫度を調節しなければならぬ、といつて六十七八度より低溫では飼育日數が徒らに長きに亘るのみで蠶十六匁以上となるのである、之に依て見ても蠶繭用としての絹絲は五齡終末期に於て作らるゝもので、五齡前に於ける絹絲は單に減身用として少許を有するに過ぎないといふことが了解せらるゝのである。世には未熟の蠶兒や桑不足の蠶を上蔟させらるゝものもあるけれども、此原料が缺乏しては成可く多量の桑を消化せしひるやうにし、且つ適度に熟した蠶兒を上蔟せねばならぬ、今五齡蠶兒の取扱に就て注意すべき二三の事項を御話し致さう。

▲五齡蠶と乾溫

次に注意すべきは乾溫の關係である、溫度丈けは適度を得ても乾溫其宜しきを得なければ圓滿の結果は得られない、其故は過乾の場合には桑葉が早く乾枯するから水分不足の爲に蠶體が水肥しがなくなつて病に罹り易き虛弱性となり病源體の蠶體の著殖に最も都合が良いことになる、就て彼の白殭蠶の如きは過濕の場合に急激に繁殖する傾向があるから、乾燥の場合には蠶體が水肥しがなつて病に罹り易き虛弱性となり病源體の著殖に最も都合が良いことになる、就て彼の白殭蠶の如きは過濕の場合に急激に繁殖する傾向があるから、乾燥の場合には蠶體が水肥しがなつて病に罹り易き虛弱性となり病源體の著殖に最も都合が良いことになる、之に反して過濕の場合には蠶體が水肥しがなつて病に罹り易き虛弱性となり病源體の著殖に最も都合が良いことになる、之に反して過濕の場合には蠶體が水肥しがなつて病に罹り易き虛弱性となり病源體の著殖に最も都合が良いことになる、就て彼の白殭蠶の如きは過濕の場合に急激に繁殖する傾向があるから、乾燥

出來るから、蠶の衛生上有効である、所謂毒を以て毒を制するといふ方法である、けれども八十五度以上となれば、マサカ火も焚かぬからも除沙を行ふて蠶座を清潔にすることは勿論のこと石灰が切薬を撒布するが良い、石灰は一箱に對して十七八匁位撒布すれば蠶座は薄霜の降つたやうになつて半日位は適當に乾くものである、又切薬ならば四五寸に切つて之を蠶座一面に撒布し、其上に給桑するのである、之等の方法に依て蠶座の乾燥を圖ると共に飼室内には空氣の流通を促さねばならぬ、室内も飽和室外も飽和といふ場合に空氣を流通させた所が仕方がないやうに思はるゝけれども、同じ空氣といはゝ、室外の空氣は消潔であるから交換する方が利益である、又雨天多く湿て困る場合もいと一日に二回位焚火をするが良い、其方法は前述の如く先づ給桑をして蔽いて夫れから燃え易き材料で焚火を行ひ、八十度位温度の昇つた處で室を開放すれば一舉にして排湿と換氣との二つの目的を達することが出來るのである。

▲五飼蠶と給桑

第三に注意すべき給桑の事柄である、養蠶業は桑葉を資本として蠶を收む仕事である、故に資本の最も大なるは桑葉であるから、養蠶組織の基は桑葉にあるといふも過言ではない、ところが東京府近に於ける十年平均の桑和場は一貫目十七八錢内外であるから、平附一枚の十圓以上の蠶見を飼育するに二百五十貫の桑葉を要する、故に一枚の平附は桑代として差引かるゝことになる、されば一枚の平附で蠶一石を取り之を五十圓で賣つた處で桑代を差引けば手間賃にも雑費にも甚だ僅か外ない、今假りに桑代を一貫目拾錢としたところで二十五圓となるから蠶見に冗費せざるやうに心掛けるといふことが、養蠶經濟上最も大切なことである、さり乍ら蠶には食ふ丈け食はせねば仕事をして呉れぬから、養蠶の上手といふことは蠶見に滿腹させて而かも食ひ殘りをさせぬに在りといはねばならぬ、世間には蠶に飽食させるといつて一度にドッサリ與へて蠶を常に桑の中に埋めておくやうな遣方をしてをる人もあるけれども、之は決して飽食せしむるの道ではない、凡て生物に深山食はするには一寸呼吸のあるもの成る程度迄は飢へて食慾を催ふさすことが必要だ蠶は一度桑を蹄み數く桑を與へて食ひ殘りのあるやうにして置くと却て食慾が不振になる、其結果食桑量も少いのである、斯樣な譬であるから、一日與へた桑を食ひ盡て後食休みをして一寸飢を覺ゆるといふ時期に及んで給桑するのが蠶に飽食せしむる秘訣である、といつて食ひ殘りを全く無くしてしまつては良くない、減じた結果は又食桑不足の際に稻から適量に加減するとが肝心だ、果して然らば一回の給桑は最早ドノ位與へたら良いかといふに、凡て強壮の蠶は給桑すると先づ腹一杯に食つて此處で暫時食休みをし、休んで又食ひ初めるといふ風があるから、一回に給する量は多く場合に於て第二回の食桑で蠶が食ひ盡す程度に給するのが適量である、然るに第二回の食桑として食休みをするときにヤダ殘桑があるやうでは給桑の分量が過ぎたのである、而して此殘桑は三度目の食桑の時刻になると既に枯れて飼食に適ぬものであるが、五飼期では格別乾枯もせんけれど、此時分には桑は蠶食の桑に汚れて居るから、之を食つた蠶は大抵衛生害さる、又微粒子病毒などの蔓延は此場合に於て汚れた桑に媒助せらるゝことが多いのである、で飼育の蠶でも食桑休みとも二回で次の給桑を爲すやうにするのが適當である、此割合からすると五飼に於ては先づ一日の給桑回數を五回とするのが最も當を得て居る。

前は三度桑なぞと稱して五飼になると朝晩分の三回か給桑せぬものがあつたのである、而して夕の給桑を大桑といつて一回に多量の桑を給與する地方もあつたが、併し之は下考へて見ても良くない方法である、けれども裏に之に一回堪して五回の給桑に改めたやうである、近頃多く四回にすれば大桑などいつて一度に多量に與ふるの要はない子は管で此大桑で多數の蠶を出して一度に失敗したことがあるから、斯かる悪弊が今尚行はるゝ地方があるならば速に改められたことを希望す、尚此五飼蠶の飼育に就ては御話すべきことも深山あるけれども時節柄非常に忙しいから今日はこゝで御免を……。

印度觀月　吉浦慶正

天竺で裕衣着て見る冬の月

朝鮮の蠶業（二）

在朝鮮
農務課員　戸塚巳之助

▲勞力及び勞銀

朝鮮に於ける土地及び氣候の蠶業上に及ぼす天惠は前已に詳述せるが如く、之に次ぐものは勞力及び勞銀の問題なりとす。

勞力及び勞銀の問題は本來蠶業經濟上の重要問題として、器械力を以て容易に動物を飼育する發明せらるる限り、勞力と勞銀とは常に蠶業生産費の大半を左右するも、適當の地、勤勞の氣候も、深遠なる智力も、豐富の資本も以て如何ともする能はざらしむ。

現に目前の事實を引證さん乎、佛人の智力も、米人の豐資、動物育上に於る生産費の高上には如何ともする事不能、密なく東洋の蠶業は一躍を遂するの止むを得ざる

もの、拘何等の原因に因り存する乎。

最近の統計に據れば、朝鮮人口は其人口の一割二百萬人と稱せらるるも、由來、朝鮮人は農業を本位とし、農業を以て生命とし、農業に從事する者は、人口の八割を占め、其他の職業に從事する者は、僅に二割に過ぎず、而も其農業たるや、盡く是れ農耕たるや、盡く是れ動物を耕作し、粗放なる農業を以て、人口の八割を占め、作物種類の普通なる農業を以て、食量品に止まるが如き、所謂副業的性質の農業たるに過ぎず、而も其農業たるや、盡く是れ農閑時期の多大なる朝鮮の事情を解せざる他邦人より之を見れば、朝鮮は「蠶」と遊惰民の際限なき地域たるが如し。

一部人士中、相率ひて、就中一般婦女子の如きは、古來、勞働を下賤視し、今、將其習慣を脱せんとするも、其習慣の強健なるや、蓋し、慣習上、盡く、生産に從事するの稀なりとす。

されば、朝鮮の現狀は一は先天的慣習上より一は其從事すべき事業の遊惰手徒食の民に充ち、勞働の供給過剰無限にして、從つて勞銀の低廉内地の夫れの比にあらず。

朝鮮に渡來せんとするものゝ中には、猥に自己身體の強健を恃み、之を薄しとし、或は、自己の能力

伊太利國蚕繭及絹紡絹糸

墺地利洪牙利		五〇〇〇

製絲の際に生ずる絲屑 輸入	一一、六五五、八〇〇	一一、七九一、七〇〇	一〇、二一三、九〇〇
同 輸出	二、六四〇、〇〇〇	一、八四四、八〇〇	六七九、一〇〇
佛國殘留高	九、〇一五、八〇〇	九、九四六、九〇〇	九、五三四、八〇〇
鬱けづりたる絲屑 輸入	二九〇、八〇〇	三二三、七〇〇	二九〇、六〇〇
同 輸出	七八五、五〇〇	八三一、〇〇〇	五三二、一〇〇
佛國殘留高	―	―	―
紡ぎたる絲屑 輸入	二〇五、一〇〇	二二五、六〇〇	一六五、五〇〇
同 輸出	六二八、五〇〇	六一九、三〇〇	六四九、二〇〇
佛國殘留高	―	―	―
人造絹絲輸出	一六一、七〇〇	七八、五〇〇	六三、七〇〇

(三)既往三年間佛蘭西に於ける絹織物の輸出

(單位千法)

品種	一九一〇年	一九〇九年	一九〇八年
絹絲及純絹絲屑織物(平織綾織紋織)ニ Foulard Crêpe Surah等	一七、二四四		
同 其他	一七四、三七七	一六〇、四九四	一四六、九四三
絹絲及絲屑交織物(平織綾織紋織)	五九、一二六	六七、三七〇	五一、九九二
瓦斯織及縮緬	五六七	六四五	六八二
チュール及ダンテル	二〇、一五八	二四、三一六	二七、二七四
純絹天鵞絨及ベルシュ	一、一五五	三三七	一八〇
交織天鵞絨及ベルシュ	七六四	三一八	三六五
純絹リボン	―	―	―
天鵞絨リボン	三、三三五	二、九七五	一、八〇三
其他リボン	三七、五二三	三五、一六五	一九、四七一
絹交織リボン	―	―	―
天鵞絨リボン	三、三七五	三、一七三	三、七九四
其他リボン	一二、一一六	一二、七九七	九、五八三
人造絹絲織物	二、〇六二	二、八四一	二、四五五
其他雜織物	―	―	―
小計	三三八、一五五	三一六、八六〇	二七〇、一八五
小包郵便物	三六、三五七	二九、五三一	三八、六四〇
合計	三七四、五一二	三四六、三九一	三〇八、八二五

(四)既往三年間佛蘭西に於ける外國絹織物の輸入

(單位千法)

品種	一九一〇年	一九〇九年	一九〇八年
Pongées, Corahs, Tussahs等	一五、五七九	二一、七四二	一一、八八三
絹絲及絲屑織物(平織、綾織紋織) 生地	四〇三	一、一一五	七九七
同 色物	八、九七六	七、七九二	七、六五八
同 黑物	三、五七六	二、三五五	二、四一九
同 小計	一二、九五五	一一、二六二	一〇、八七四
絹絲及絲屑交織織物(平織綾織紋織)	五、八六〇	四、七九六	四、七五六
瓦斯織及縮緬(純絹及交織)	四、四二六	四、五九九	三、九七七
チュール	七八一	一、〇七六	七三一
純絹天鵞絨及ベルシュ	六九八	六六〇	六五八
絹交織天鵞絨及ベルシュ	六、七二八	四、八六五	二、六八八
純絹リボン	三、七一〇	三、七七七	三、一六二
絹綿交織リボン	三四八	三七四	五二七
人造絹絲織物	一、九四七	二、一三六	二、七九三
其他雜織物(組物及下表類を含む)	―	―	―
合計	五七、二一七	五九、五六七	四六、〇五四

(五)佛蘭西に於ける別絲及絲屑製織物、組物及リボン輸入及輸出國別表

(但し輸出には小包郵便物を含まず)(單位千法)

國別	輸入 一九一〇年	輸入 一九〇九年	輸出 一九一〇年	輸出 一九〇九年
英吉利	一一、五七六	一〇、一八九	一五八、八五四	一五八、四〇九
米國	―	―	五三、五一九	六八、一九一
獨逸	一四、三一六	一三、七一三	一一、二三一	一〇、〇六四
白耳義	―	―	一五、九六一	一三、〇一〇
瑞西	一三、九四三	一二、四九一	一七、六八五	一六、四三三
露西亞	―	―	二七三	三六二
伊太利	四四一	四二〇	四、二九〇	四、五〇五
墺地利	―	―	六一四	八〇五
西班牙	―	―	三、五六〇	二、三六五
土耳其	―	―	六、五七三	四、六六一
伯剌爾	―	―	八一七	七三五
アルゼンチン共和國	―	―	五、五八二	四、八五七
アルヴェリー	―	―	一、二六〇	一、〇七八
其他諸國(日本等)	一六、九一一	二三、七五四	五七、九三六	二二、一八五
合計	五七、二一七	五九、五六七	三三八、一五五	三一六、八六〇

(外務省報告)

蠶絲業施設の完備

養蠶及製絲の改良を期するがため施設すべき事項は多岐なるも政府の地方事業として今後に期待する所は大略左の如きものにして必要に應じ緩急を計り漸次之れが完成を期する方針なりとか

一、地方に蠶業講習所を設置する事
二、道府縣郡市に普く技術者を設る事
三、蠶種飼育乾繭生絲の搬送及荷造繭の販賣等に關し其目的經營を獎勵する事
四、製絲工女の養成及保護に付き適當の方法を講する事
五、蠶絲業に關する産業組合の設置を獎勵し所業に要する低利資金の融通を圖る事

優等賞の光榮を擔へる　義濟堂製絲會社

▲地方産業の開發に努め器械製絲を起す

南嶽

試みに一度中國の製絲界に遊べる者の其の名を聞かざるなきを舉げんか義濟堂製絲會社の如き當に其の一なるべし。同社は明治六年八月の創立にして今や實に四十年に垂んとするの歷史と經驗とを有し、嶄然中國製絲界に其の頭角を現す本會山口支會品評會に於て優等賞を得たるもの又偶然にあらざるなり。同社創立の當時は義濟堂と稱して地方産業の興隆に力め、特に意を製絲及綿織物に注ぎしが、時代の推移は企業上に於ける資本の威力をして益々大ならしめしより、三十年十月遂に之を會社組織となして合資會社義濟堂と改稱し益々業務の擴張と改良とに努力せしが、各産業中特に蠶絲

業の將來有望なるを察し、先づ意を製絲の業に注ぎ種々調査の結果患繰製絲場の設立を決定し、十四年工を興して之を大成し、社員を先進たる群馬縣に派して技術を修得せしめ、製絲經營の傍ら地方子女に製絲技術の傳習をなし、大に斯業の發達に努力したり。

同社の計畫は着々として功を奏し、大に果の收むべきものあるに至りしが、同社は更に此の機に乘じて斯業の根本的發展を畫策し、新に同好製絲會を組織し、蠶絲業に必要の貴重書籍を備え付け、又或は各種の試驗を行ひ、或は講演會を開き以つて當業者研鑽の資に供し、或は技術者を聘して講演を期せも、然るに時世の進運は患繰製絲の衰頽を招守するを得ざらしめ、又は上記の臨機設備と相呼應して製絲組織を全然踏襲式となし、工場を新築すると共に、之が技術の傳習をも行ふに至れり、之れ同社が今日あるに至れる第一歩にして又實に同地方器械製絲の靈魂なりとす。

▲養蠶法を改良し士族授産の功を樹つ

製絲業一度製絲に成功せしより漸く地方桑業に重きをなしが、尚當時地方養蠶の術極めて幼稚にして蠶種の孵化率の如きあるも人力の之に抗すべき術を知らず、空しく黄白を泡士に委するの嘆を免れざりしより同社は敢然之が改良を企圖し明治十七年養蠶教師を福島縣より聘して養蠶傳習所を開設し、專ら蠶種製造法の普及に努力せり、此の效果は遂に空しからず、地方の蠶況一變に其面目を革むるものあり、然るに同年山口縣は會を發して士族授産の事を定め同社をして士族製絲傳習所の業務を執らしめしより、更に工場を増築して機五十臺を設置し、以つて士族授産の業を起し傍ら蠶種製絲の傳習をも併せ行ひ、養蠶に製絲に内外相應じて斯業の振興に貢献せり。

▲繭出生絲の製造に從事す

外養蠶改良に成功せる半面に於て製絲業は更に大なる發展を遂げ二十二年には患繰製絲を悉く廢止し、之に代ふるに轉繰機を以てするの機運に向へり、然るに從來の製絲業は横濱問屋の生絲製造のみに從事せる同社が二十一年偶々其の製絲を横濱問屋に託して海外に販賣せるに非常の好評を博し、實行極めて良好なるより、同社は大に悟るところあり、斷然從來の内地向生絲の製造を中止して專ら輸出向生絲の製造のみに從ひし、結果益々良好にして其の規模を改めざるべからざるに至りしより、二十三年新式製絲器械五十窓を設置せり、然れども急劇なる製造は到底其品質を以つて百窓とし、三十一年には從來使用し來りし其機械式を變じてケンネル式となすに至れり、同時同人の奇闢、努力、蓋し想ふべきなり。

▲眉藤整理事業を起す

既にして地方養蠶業の一大の面目を改め飼産組の成功を見るに及びて所謂整理事業の急務に伴すべからざるを認め、一は以つて同社の副業とし、一は以つて地方養蠶家の收入を増加せしむるが爲め二十八年滋賀縣より眉藤製造の業を起し其の普及に勉むるとこるあり、茲に於て地方養蠶家の收入は漸く増加し同社の德を讃として老若相抱いて歌腹するを見るに至れり。

▲製絲の統一を企圖す

同社の隆運は年一年其の歩武を進め三十六年には百十七窓を數ふるに至りしが、同人の生絲の市場に於ける其の品質の統一にあるを看破し之が第一策として煮繭分業を施行し、爲めに品質の一定を得たるのみならず、作業の進捗に著しき利便を生じ、從來年一萬五千斤を超ゆるに至れり、而同社は其の第二策として共同出荷の有利なるを認め同社の相近接せる國製絲練式會社と議を調へ明治四十年より練濯業名義の下に同一商標を用ひ市場に販賣を試みし結果、高尚なる好なるものあり、然るに此の時に當つて地方養蠶家漸く荒忙の色あり、繭價漸次粗惡となり盤價日に失墜するの傾向あるより、之が挽回を促さんと欲し、同社主唱者となりて地方製絲家を糾合し、製絲場購入繭品評會を開設し各製絲場購入品中精良と認むるものを選び之を出品し、製絲經濟に適切なる審査を招集して之を比較研究を遂げしめ、優等品に對して賞品を授與して之を奬勵せり、而して之と同時に他方に於ては當業者の希望により無料にて精良なる蠶種を購入し繰糸し、製絲の統一を利用して蠶具の改良に便する等意其の目的の實行に努めたるより地方の蠶況再び驚々其の品質を一定し、品質亦向上するに至れり、茲に於てか四十一年新に汽罐を増設し、乾繭室を改造し、從來の二口繰を廢して三口繰となす等各部に刷新を行ひ益々良繰の製造に向つて意を注ぐに至れり。

▲優等賞拜受の光榮を擔ふ

因果は夫れ影の形に沿ふが如きか、明治初年以來四十歳に乗じとするの間斯國繭絲界に利し、他を益せるの効果は然中國製絲界に其の名聲を擅くるに至りしが、水倉山口支會品評會に於て同社が名譽ある優等賞を受領する

傾斜して綿々たる阿武川の小丘の間を北走して高傾の沃野を展開し、農耕甚だ賑ふ、而かも他に工産なく、確業あるなし君漸く長ずるに及んで地方副業の乏しきを慨し、風に養蠶の利益を唱導し、偏に其の範を示すに力めたりしが、果然明治二十六年に至り乗望を以て明木村勧業會員に推されたり。

君又養蠶を行ふに桑園は正に其の基なりとなし桑園の開拓に志し或は苗書により或は之を隣村に訪して其の實行に着手せんとせしが、明治二十九年機の熟せるを洞見して遂に數町歩の桑園を開拓し良苗を得て之が肥培に力めたり、然るに君が多年の研鑽と苦心とは空しからずして未だ幾何ならざるに成績甚だ顕著なるものあり、君歓躍して大に喜び三十一年夏に之が増植を企て縣下有數の桑園を得るに至れり、當路君の熱心にして衆に範たるを嘉賞し前後二回に亘りて之に奬勵費を交付せり。

▲横田人工養蠶法を研究す

出づれば蠶業の名家につきて實技を收め、居れば書を繙き智能の啓發に力を致す等君は之を日課として必ず力めたるところなりき。

明治三十一年四月横田人工養蠶法の創始者横田勝三氏の神奈川縣藤澤町に於て該法の講習を開くと聞くや日頃異渡別法を研究して斯業の改良を大成せんと企て君自ら食桑の動くを熟ぜず、然も恰かも心よし當時地方に於て人傾き横田人工養蠶業の改良法も内に輸入し得失の存するところを研究せんとの希望を懷いて横田人工養蠶法の講習會の開設を君大に喜び有志たるよし阿武郡蠶業奬勵委員たり、編者は多々君が斯業の改良に熱心なるを聞ひ君を迎招し、命ずるに該法の習得を以つてし君又大に感激し、命ずるに該法の習得を以つて其の使命を完うせんことを期し行李匆忙、直ちに東行して會に臨めり。

君の會に在るや熱心衆に秀で、一言の微、一の技苟くも憂養あれば之を問ひ横田氏をして其の精魂を吹ぜしめしといふ、在ること二ヶ月無事其の業を卒へて歸任するや直ちに横田人工養蠶法試驗主任を命ぜられ技に君は習ひ得たる妙技を盡して地方蠶業の興隆に貢献するところあるに至れり。

▲巡回教師となりて地方蠶業の發展に與る

養蠶上に於ける君が技術と學識とは漸く地方人の認むるところとなり、其の之を勧して教を受けんと乞ふもの年と共に増加し、君が心逸亦漸く多忙となれり、然かれども君招かるれば遠近を問はずして喜んで至り、教導懇切を極む、而して君の一度赴いて教ふるや遂算図作の業あるを見ず、即ち郡は君を巡回教師となし以つて地方蠶業の興隆に資するの將來得策なるに鑑み、二十四年遂に巡回教師を命ずるに至れり。君之を乗望し益々奮勵努力し、東西に馳せ南北に來往し、蠶熱風を厭いて之が指導の任に當る、地方の蠶業爲めに愈々進み、未た數年を出でざるに早く既に全く面目を改むるの好果を收むるに至れり。

▲優等賞受領の名譽を擔ふ

君又自らの產するところを公にして衆評に銘んとし公私の共進會、品評會に出品すること十數次、常に受賞せず治三十四年には阿武郡第二回蠶生絲品評會へ繭を出品して二等賞を、三十五年第二回山口縣物產共進會へ繭を出品して褒狀を、三十八年本會山口支會第三回品評會へ繭を出品して三等賞を、三十九年阿武郡農會第一回物產品評會へ繭を出品して賞狀を同年山口支會第四回品評會へ繭を出品して四等賞を、四十一年同第六回品評會へ繭を出品して二等賞を、四十二年第二回明木村農產物品評會へ繭を出品して一等賞を、同年阿武郡物產共進會へ繭を出品して二等賞を得たる如き又以つて君が熱心の結果たるを想いて懷ひ得たるは其の名譽當に於て尋常人人のみの占有に屬せんや。

君今や明木報國蠶業組合幹事となりて會計主任を兼ね、又本會蠶業奬勵委員たり、編者は多々君が斯業の爲めに盡瘁せらるべきことを囑して止まざらんとす。

全國生絲製造調査

農商務省蠶業試驗所の調査に依れば全國の生絲製造月數は實に三十八年の製造高千六百四十四万四千七百四十四万四千九百〇九）

	數	量
▲機製生絲	一〇七	三一一一

蠶絲業奬勵の終局問題

特別講演　蠶絲試驗場長　波多野鶴吉

今日の蠶絲業は、蠶種、養蚕、製絲等、それと分業になって居るけれども、昔日は之が總業に行はれ、而して自家用に供したのであつたから、蠶桑なくすれども家用の目的で奬勵したのである。故の「五絲の宅、之に樹うる桑を以てすれば七十の者以て帛を衣るべし」（孟子盡心篇下）、何れも自家用目的の蠶絲業であつたと云ふことが分るのである。其の他祝の勅令家事分業乃至教育家としての故吉田松陰先生が、松下村塾に於て弟生を共に蠶を飼はれた時

蠶絲神此遺　輕煙誠可人
戦桑堂藝々　繭就萬端吊
如何松下村　蠶事莫不振
吾獨持蒔蒔　試養不惜身
見笑市教力　蚕時多雨日
先期蔟三旬　雨則蔟三旬
欲窺一色光　豆飯忽天神
何之在一般の子弟に與へん爲め、國語を以て左の如く讀み下さば、略ぼ其の大意を了するものに足るであらう。

五絲各堪宅
地下豈無桑
蠶事莫不惜
蠶事皆事事
蠶事皆事事
聊贊造化仁

蠶絲の上に於ては、其の生産費の高き事である。故に蠶種の製造、養蚕、製絲等の如き、今日の蠶絲業は、之を分業の方針に依る外ないのである。其れは何なる原因から起つたかと云へば、初め我上の奬勵方針は故大久保内務卿の慶知に出でたものの筆者見た所では、蠶種の製造は、同卿は維新の元勲であつて、今日製絲場の發勵が著しく發達されて來た所以である。而して明治十七年に至り、農商務省の設置されたのである。而して同二十二年、之を西ヶ原に移し、蠶種檢査員を發足する目的にて、各縣より多數の生徒を惹り、國費を開始せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同二十三年に於ては大幅度に高め、蠶種檢査員のみならず、蠶業教師たるべき人材を養成せるこゝとなり同三十年に至り、蠶業講習所と改稱し、更に同三十五年に至り、新に蠶桑部の新設を見るに至つたのである。解來他年生れの者に絲に絞ることが出來たのである。又蚕部者に於ても、幸に今日は製絲場も備はに於ては、信州上田に蠶絲場も開設せられ、東京内山下町に農商務省蠶絲試驗場とふのが設置せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同二十二年、之を西ヶ原に移し、蠶種檢査員を發足する目的にて、各縣より多數の生徒を惹り、國費を開始せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同三十五年に於ては大幅度に高め、蠶種檢査員のみならず、蠶業教師たるべき人材を養成せるこゝとなり同三十年に至り、蠶業講習所と改稱し、更に同三十五年に至り、新に蠶桑部の新設を見るに至つたのである。解來他年生れの者に絲に絞ることが出來たのである。又蚕部者に於ても、幸に今日は製絲場も備はに於ては、信州上田に蠶絲場も開設せられ、東京内山下町に農商務省蠶絲試驗場とふのが設置せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同二十二年、之を西ヶ原に移し、蠶種檢査員を發足する目的にて、各縣より多數の生徒を惹り、國費を開始せられたのが、今日の東京蠶業講

五年一部者等は、何れも同所の出身者である、斯の如く維新當時の蠶絲業奬勵に於ては其の終局問題が如何に狂熱であつたかと云ふことが察せらるゝ、原因から起つたかと云へば、初め我上の奬勵方針は故大久保内務卿の慶知に出でたものの筆者見た所では、蠶種の製造は、同卿は維新の元勲であつて、今日製絲場の發勵が著しく發達されて來た所以である。而して明治十七年に至り、農商務省の設置されたのである。而して同二十二年、之を西ヶ原に移し、蠶種檢査員を發足する目的にて、各縣より多數の生徒を惹り、國費を開始せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同三十五年に於ては大幅度に高め、蠶種檢査員のみならず、蠶業教師たるべき人材を養成せるこゝとなり同三十年に至り、蠶業講習所と改稱し、更に同三十五年に至り、新に蠶桑部の新設を見るに至つたのである。解來他年生れの者に絲に絞ることが出來たのである。又蚕部者に於ても、幸に今日は製絲場も備はに於ては、信州上田に蠶絲場も開設せられ、東京内山下町に農商務省蠶絲試驗場とふのが設置せられたのが、今日の東京蠶業講習所の起源である。而して同二十二年、之を西ヶ原に移し、蠶種檢査員を發足する目的にて、各縣より多數の生徒を惹り、國費を開始せられたのが、今日の東京蠶業講

蠶絲業奬勵の終局問題

〔一〕偉大方式

是で偉人が中心となつて、突然なる大革新にて、堅然たる優良の絲を、多量に製造する方式にして、奬勵方式である。

〔二〕偉小方式

是は偉人が中心となつて、突然なる小革新にて、極めて優良なる絲を、少量に製造する方式にして、我邦婦人の得意とするところのものである。

〔三〕凡大方式

是は偉人が中心となつて、粗雑なる小革新にて、既に多量に製造する方式にして、各地往々見るところのものである。

〔四〕凡小方式

是は偉人が中心となつて、粗雑なる小革新にて、既に多量に製造する方式にして、各地往々見るところのものである。

〔五〕拚衆方式

是は偉人が中心となつて、偉小方式と凡小方式のものが共同して奬勵する方式にして、各地往々見るところのものである。

以上五種の方式中、偉衆方式は、最も理想的にして、偉大方式に次ぐ方式である。

偉小方式は、凡小方式の上に位するものである。

凡小方式は、偉小方式の下に位するものである。

拚衆方式は、偉衆方式と凡小方式の中間に位するものである。

偉大方式は、偉衆方式と凡小方式の中間に位するものである。

偉衆方式は、偉大方式と偉小方式の中間に位するものである。

偉小方式は、偉大方式と凡小方式の中間に位するものである。

凡小方式は、偉小方式と拚衆方式の中間

である、金は皆て「製絲の道如何」と題して、製絲業の利益は、第一に其中心たるべき人物に重きを置かれば成功に不可能であると論じたこと、即其の中心人物たるべき人に、何ッて特らるかと云ふに、固より教育と必要とは云ふ迄も無きことは天賦、一は其の自身の修養に由るのであるから、別の人力見出すことが容易ならざるのみ、然らば其の人力見出すまでは製絲の經營が出來ぬかと云へば、されば都合ぬから仕方と云ふまでには至らずとも、比較的簡単に出來有望なる者人を選びて經營が創めねばならぬと思ふのである、此の場合に當り特に注意を要することは、彼の無責任な誘へに惑はされて製絲の經營せんとする場合に當り、其の中心人物たるべき人に、自己の本領を發揮するに適する場合に當り、其の場合に於ては、自己の本領を發揮せんとする場合に當り、其の場合に於ては、自己の本領を發揮せんとする場合に當り、其の場合に於ては、自己の本領を發揮せんとする

之後さは柔軟密所最は牽強も非常に小且上の好考逆にして頭髪を点ら毛の殺れたは枯木為に似たりでも言ふべき方に後ハ其枯木を樹の根株

改良上簇法に就て

通常會員　河野高之助

蠶兒の上簇中最も注意を要するは室内の乾燥を計ることゝ、蠶の温度に依存することゝ、簇の温度に比較的温度の差を除去することである。前者の排濕は簇の温氣を排除する困難なる事情にあるが、後者即ち蠶の温氣を排除することは比較的容易なる事である。故に斯の如く排濕法は喪失が抛方行はるゝと雖も上簇に際し蠶兒の上簇中最も注意を要するは室内の乾燥を計ることゝ、蠶の温度に依存することゝ、簇の温氣を排除

りませんから心配はしますが、為には如何にして製鐵業者法天病傷が多うございます。故に甲が貧民と云へば乞食や反別の、微分析論はやかましいの沢あり、普通の鐵鋼に成す者に於て、中央に本邊分散すべて、西京の講習所に本邊の研究を能して、安易かをつかを様し鋼鋼する方が安くないかと思ひます。此問題は如何でありますか、是は是さて日本製鐵會と云ふものの名、是に無論鋼人的であますけれども、學術の研究なり或は開發なり海外調査の事業をやつて居りますが、今此度中央鋼合等に組織しまして、鋼鐵會と云ふものの名、此問題は如何でありますか、是は是さて日本製鐵會と云ふものの名、此問題は如何であり

○男爵田中文郎君

此の種が急保中の急保であると云ふことですが、種が悪らで別でして同官に成つて頂きませぬ、苦るの器に於て二十五年位前に、此の種が輸入されました、其時分に於ては、種の一致と同時に同官に成つて居ると云ふ事が、此の種が一致しても同官の功能に依つて、方は之を病にしなければ、種が悪いと思へる出来ると云ふことは、種の一致と同時に同官に成つて居ると云ふ事が、此の種が一致したけれども、此の種が一致したけれども、此の種が一致したけれども

ない點でありますから、此點に付て大體政府の意見を承りたいのであります

○政府委員（下岡忠治君）　唯今上國さんから段々の御問であります、御論政府に於きましても、若し是が不都合であるとか、ふことを仰せられましたところのものであれば、其位正方に付て出來ない點があるのであります、そこに十分に前以て御來知を願ひたいなどと云ふことを、ちょっとしましたが、併し今の御考の様に、大分御問題になつて居る、殖産なども、ほんの御考へとか云ふ御考であるが、殖産なども、第一に下部で出來て居るやうでありますが、決してさうでは無い、是には其始め本省の者に御聞合あつて、其際得へましたが、十三條の規定だらうが、三十七條の規定だらうが、其他第百十五條の規定だらうが、是は皆道の義務案に關して出來て居るやうに出來て居るから、之を簡単に除して一般の其民の所謂やつて居るものは、切捨てるあるやうに云ふことなどせずに、なるべく宜い、それも多少制限を加へるとも、是は皆道の義務案に對して道府縣に云ふものは、唯と雖々たるもの、先づ通常無いと御承知を願つて宜いと云ふ考であります。一方では警察的にやつて居るから、警視廳警察官が若し惡る、現に現行法の規定やつて居る、警視廳警察官に對して相當に驗遇の規定が無い點、例へば三十五條の規定の如き、是は法律の規定に於ても、警視廳警察官に對して道府縣と云ふ點は陣山さん、別に警察總監の規定の如き、是は法律の規定、警察規所得稅と云ふやうな規定を御覧になつて、無、ば黒野氏でも奉職警察官の要るところ、警察規所得稅と云ふやうな規定を御覧になつて、是純に驗遇するだけでは、者すゝ、犯罪があるとか云ふことは決して無いと、政府が信じて居ります、其信頼つて居ると、逆に他部の使役が起るかも、警視廳警察官に對して道府縣と云ふ點に非常に驗遇の規定に於ても、是は法律の規定、唯今御話しにやうな點であります、例へば三十五條の規定の如き、是は法律の規定、今日の三分の二以上の賛成者なければならぬと云ふ點に於ても、警視廳警察官に對して、道府縣と云ふ點に於ても、是は法律の規定、唯今御話しにやうな點であります、例へば黒野氏でも奉職警察官の要るところ、警視廳所得稅と云ふやうな規定を御覧になつて、無、ば黒野氏でも奉職警察官の要るところ、警視廳所得稅と云ふやうな規定を御覧になつて、是純に驗遇するだけでは、者すゝ、犯罪があるとか云ふことは決して無いと、政府が信じて居ります、其信頼つて居ると、逆に他部の使役が起るかも、警視廳警察官に對して道府縣と云ふ點に非常に驗遇の規定に於ても、是は法律の規定、唯今御話しにやうな點であります、例へば三十五條の規定の如き、是は法律の規定、今日の三分の二以上の賛成者なければならぬと云ふ點に於ても、警視廳警察官に對して、道府縣と云ふ點

鄙めて居る、され共事業の發達萬歩に譬ひになると云ふことも當然の結果であらうと思ふ、然るに現ー法律で以て半額只有ル補助すること所出來ると云ふ現在立て置かなければならぬと云ふ必要が何處にあるのであるか、是は私が解することが出來ない、或程財政上の理由もあるとも知りますが、此

に負擔關係の中央會が為へる必要が現在にはないので、果樹には同關係の分區ごとに中央會が設ることにせず、統一的に中央までも持つと云ふものにする方が適式から、同關係の分區は總會だけの規定を設けて、ならう、同關係の分區は總會だけの規定を設けて、ならう、同關係組合に入れて置樂に關して云々と云ふことが入れても同じである訳、同關係組合は一層簡結案にあれた方が便利であると云ふので入れました、更に角度行法の規定では他の組合が出來ませぬから之を設けました政府のところでは海外貿易に大影響を與へるあるものは、中央の統一機關の法律である、各種の中央はけな案の組合を設けると云ふ報の必要はなかろう、現に蚕業組合にならて居る、同立の規定が出來て中央會が設けるとなつて居ると云ふ結報になつて居る、同立の規定が出來て中央會が設けるとなつて居ると云ふ結報に命國農會と云ふものが出來て居る、之は別問題で、現行法の規定を此に入れると云ふ考で、置入つたのであります、それから第二の強制力と云ふ問題は、是は前回にも御答申上げましたが、現行の蚕糸業組合法の中に強制のやり方は既定なないと云ふことは認めて居ります、併しながら現在の學術技術の上から考えれば外に術方が出ないと云ふことは故で居ります、之は強制のやり方に依つて其の目的を達成することは出來

しては、其一項に規制つて居るのでありますが「主務大臣又は地方長官必要と認むるときは制限禁止令を制限することが出来る」とあります。前段禁ずると云ふ場合の事柄の中に「地方長官」とあります。「地方長官」とは何を指すのであるか、又は此制限令を禁ずる時は何を指すのであるか、其一点を伺ひたい。

○政府委員（下岡忠治君）　禁令を制限するとは、此制限令を解除する意味であります。又は此制限令を禁ずるに付ては、「地方長官」とは、道府県の長官を指すのであります。

○議長（田口卯吉君）　次に第二十條に「建築線に接して建物を築造する場合に於ては、其建築線の外方に突出して建物を築造することを得ず」とあります。此建築線と云ふものは、何の法律に基いて、何の法律に依て、何の法律に依て、何の法律に依て

要すると認めなければならぬ、所謂にやつて行く以上は、とても個月月の間にそれをえて及ぶことは出來ないと認めるする以上は、それえるの間は幾ひ小銀國に於て行つて居ると云ふの為例が沖山おつて、又金庫の結果が相當に悪つて居る、即ち他島にしても島國にしても、夜は三度にしてゝ、岡山に於ては、其他國四方面で出ゆつて居る、其方が相當に相果なる位を行ふ、其方が相當に相果なる位を行ふ、其他國四方面で出ゆつて居る

絲況

二十八個、賣了に於て八百六十三個を減じたが、今本月中の持越と入荷とを合したる三萬三千八百八十九個半より、賣了と積戻とを合したる一萬七千百九十五個半とを差引けば月末の在荷は一萬六千六百九十四個である。

尚參考の爲め四月中に於ける日々の生絲集散の狀況を示せば左表の如くである。

明治四十四年四月自一日至三十日生絲集散日別表

惣城太□　岡崎中△　産業組合○　新潟×　新潟し＋

		入荷	手合	賣了	引戻	輸出	積戻	産地名	社名	別種	最高	最低	價格	摘要
十二	日													
十三	日	五四五	四一九	一、二八半		八六三	一〇三半	五七 信濃	同日本社	白				
十四	日	三六七	一二六	六六二		一、一五九	五九 武蔵	甲斐	信濃	甲斐	一、一五	八八〇		雇人賃安に付陸奥向へ壁分の賣行ありたれども何分市況は商自からざる足取なりし
十五	日	一七六六	四一六	六〇九	七七八									當月口へゆしく手合出來したれども遂次安なる入氣にて兎角商自からざる成行なりし
十六	日													十圓安に付陸奥向へ壁分の賣行ありたれども何分市況は商自からざる足取なりし
十七	日	四九三半	一九八	六五九半	七二	二六九	四五 武蔵	大和	若代	甲斐	二、一五九	六一	信濃	日曜日
十八	日	七九四	四五	五六三	八二一	三五	三七	上野	信濃	上野	一二五			大祭日
十九	日	四九一	三七	五六六	一、二二〇	二三	三五	交水	常田	交水				
二十	日	六二四	二五三	一、〇六四	二八五半	二三半	一九	武蔵江	信濃多	武蔵江				
二一	日	五六八半	一〇半	二八五半	二〇〇	一九		古	小口	古				
二二	日	八四五		九八	三一八	四八		社	組	社				
二三	日			一八	四八			社	豊	社				
二四	日	九七半	四一六	五五八半	七七七	一二	一〇	甲斐	信濃	甲斐	二七	九一五		雇人賃安にて陸奥向へ壁分の賣行ありたれども何分市況は商自からざる足取なりし
二五	日	五八四半	三六	一〇	七七七	五一四	三六半	武蔵	信濃	武蔵	信濃	八八〇		當月口へゆしく手合出來したれども遂次安なる入氣にて兎角商自からざる成行なりし
二六	日	五四七	四九六	五五六	三三三	五一四	三四	信濃	信濃	信濃	信濃			日曜日
二七	日	八〇六	三一五	七七半		五八	五八	信濃	信濃	信濃	信濃			大祭日
二八	日						九九	武蔵	信濃	武蔵	信濃			

絲況

前日繰賣紙有りたる口へ上一番糸買高直にて手合出來ざりし

信州上一番は過剰の工合にて買入氣乘薄にて手合少見ざりし

相場に逐に者り過剰なれども市況は活氣なし

補充買も一寸一息の發にて新規手合曾無なりし

日　曜　日

イギリスアンドーセンデーにて大略休業し一向新規商談なかりし

來た様々しく入電ゼザ様々商談なし

一般に靜にして商談薄なりし

廠三館へ前往文口へ信州物十圓高にて手合出來ざりし極いて商自からざる成行なりし

安直持ちの入氣にて抱々しく商談めちざして、穀氣重の成行なりし

一般安にて少し許りの成行なりし

日　曜　日

休日繰賣紙有りたる口へ上一番糸買高直にて手合出來ざりし

信州上一番は過剰の工合にて買入氣乘薄にて手合少見ざりし

相場に逐に者り過剰なれども市況は活氣なし

補充買も一寸一息の發にて新規手合曾無なりし

日　曜　日

廠三館へ前往文口へ信州物十圓高にて手合出來ざりし極いて商自からざる成行なりし

安直持ちの入氣にて抱々しく商談めちざして、穀氣重の成行なりし

一般安にて少し許りの成行なりし

日　曜　日

休日繰賣紙有りたる口へ上一番糸買高直にて手合出來ざりし

信州物は商談に上ちざりしが協物にて直見切實に覺分かず國筋へ手合ありき

又十圓安に付陸奥向へ壁分の賣行ありたれども何分市況は商自からざる足取なりし

兎角商自からざる成行

廿九日	五二三(中)	一一〇	九八七(中)	—	一,〇二六 玉絲一二	六九(中)	岩代 信濃 共同 日本 組 白 ダルマ × □	八七〇 八三〇
三十日	—	—	—	—	六二九	—		
合計	一八,一四七(中)	四,五一八(中)	一五,八五五(中)	七二	九,六五六 玉絲一二	一,三四〇		

補充口へ少々買行ありて商談纏りなし
日曜日

倘本年四月中の生絲集散の狀況を示し、且つ昨年四月末の夫れとを對照すれば左の如くである。▲減じた印×は增した印

年次	持越	入荷	賣了	殘高	繰越	輸出數量	輸出價格
四十四年一月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十四年二月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十四年三月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
四十四年四月	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	
四十三年四月		×[illegible]	▲[illegible]	▲[illegible]		▲[illegible]	

紐育市場

紐育生絲市況に就き同地駐在水野總領事よりの電報左の如し。
生絲は先週の跌落に次ぎ「センセン」(?)就に逆行せり主因は歐洲に於ける需要大に增加したるに依るが如し(四月十一日發電)
生絲は先週相場强かりしため買方手控の氣味あり關西優等三、八五優等三、八〇「エキストラ」三、七五信州一番三、一〇二番三、〇五(四月十八日發電)
生絲は機屋買入手控のため一般に氣配引立たず關西最優等三、八〇優等三、七五「エキストラ」三、七〇信州一番三、六〇二番三、四七(四月二十五日發電)
生絲市場は差したる動搖なきも製造家は當座の需要を充す外更に買進む模樣なく寧ろ手控の方なり關西最優等三、七七優等三、七五「エキストラ」三、七〇信州一番三、六二二番三、四五(五月二日發電)

里昂市場

里昂生絲市況に就き同地駐在木島副領事よりの電報左の如し。
生絲依然沈靜一番中器械絲九乃至十一「デニール」相場四十三見當、同十三乃至十五「アニール」相場四十法七五(四月十二日發電)
生絲沈靜相場持合ふ一番中器械絲九乃至十一「アニール」相場四十三法二五見當、同十三乃至十五「アニール」相場四十一法見當(四月二十五日發電)
生絲市況横濱高値に連れ引締り氣味一番中器械絲九乃至十一「アニール」相場四十三法五十、一番中器械絲十三乃至十五「アニール」相場三十九法五十(五月三日發電)

人事彙報

敍正五位　從五位勲五等　足立元太郎
任鳥取縣技師敍高等官八等　谷岡照次郎
石川縣農事講習所技師ニ任ス　石川縣農事講習所技手　笠原熊三郎
九級俸下賜　山形縣蠶業技師　鷲野泰治
年俸七百圓下賜　青森縣立農事講習所技師　渡邊俊武
十一級俸下賜(愛媛縣)　愛媛縣立農業學校教諭　池田榮太郎
年俸六百圓下賜(大分縣)　大分縣農業技師兼大分縣農事講習所技師　下元鹿之助
十二級俸下賜(同上)　大分縣立農學校教諭　樋口三郎
年俸六百參拾圓下賜(長野縣)　長野縣農業技師　藤崎卓爾
青森縣立農事講習所長ヲ命ス　青森縣農事講習所技師　渡邊義武
任東北帝國大學農科大學教授年俸九級俸下賜　東北帝國大學農科大學助教授從六位　須田金之助

會務錄事

●支會の設置及支會職員の囑託

長崎縣には從來地方委員部を置き會務を處理致し來りたるが同區域内會員數增加せると本會々務の發展に伴ひ今回委員部を廢して新に支會を設置し會頭の推薦により、總裁殿下より左の通支會長囑託あらせられたり。

長崎支會長　犬塚勝太郎

本會福井、佐賀二支會職員中異動ありたるに付其支會長の推薦に依り本會々頭より夫々左の通囑託せられたり。

福井支會委員部長
足羽　螢田又兵衛　今立　青荻助太郎
丹生　佐々木武介　南條　東忠嶽　敦賀　士特慕白
三方　白男川讓介　遠敷　大山綱岳
佐賀支會商議員　船山右松　福田秀太

●園藝委員の囑託

本會定款第二十六條に依り本會々頭の推薦に依り、總裁殿下より左の通囑託あらせられたり。

東京蠶業講習所囑託　農學士　廣瀬次郎
同　技師　農學士　森繁太郎
同　同　竹内秀雄
同　技手　同　鈴木英亮
京都蠶業講習所技師　農學士　本多寬芳
同　同　同　秦直三
同　同　下井盛夫
農事試驗場技師　同　小林房次郎
上田蠶絲專門學校教授　三谷數
東京高等工業學校教授　工學士　吉武榮之進

●奬勵委員の囑託

本會奬勵委員規程により其後囑託せられたる奬勵委員左の如し。
栃木縣河内郡横川村斎藤良次　平石村坂本卯七郎　豐郷野村増淵俊光　本郷村野澤龜吉　上三川町猪瀬德三郎　吉田村上野幸三郎　藥師寺村内木茂之助　明朝村稲見芳三郎　雀宮村五月女甚一郎　姿川村小平榮三　城山村參倉四郎平　岡本村粕谷作　富屋村大塚吉造　大澤村福田長次郎　豐岡村川村良次　篠井村福田新一郎　羽黑村阿部實　絹島村高橋惣一郎　古里村高橋長庫　田原村清野長吉　豐郷村和貝庄晋
同鹽谷郡矢板町河井晴　泉村伊東善吉　箒根村伊東吉平　鹽谷村田代近三　三依村阿部喜太郎　栗山村高山昇　藤原村石川近吉　舟生村唐木澤儀造　玉生村大島岸三郎　大宮村小岩井久三郎　片岡村永井孝一郎　氏家町齋藤晋次郎　阿久津村加藤友次郎　北高根澤村岩瀬孫作　熟田村佐藤久作　喜連川町渡邊仲三郎
同上都賀郡鹿沼町鈴木厚嶽　北押原村荻原榮太郎　南押原村一色安次　西方村古木藤四郎　粟名子村中野喜一郎　清洲村安生武一郎　南摩村安生方治　栗野町福田富士　稲尾村富田錫興　永野村毛東作藏　加蘇村大橋實治郎　東大芦村上澤介五郎　西大芦村上澤勝太郎　小來川村大橋爲三郎　板荷村福田鐵四郎　落合村富田宇一郎　今市町高柳清造　日光町齋藤富吉　足尾町長谷川仁　北犬飼村和久井久四郎　菊澤村小林尊儀
同安蘇郡佐野町飯部庄松　犬伏町川島宥一郎　新合村川田嘉一郎　界村永島禮七　飛駒村齒塚留七　植野村飯塚和市　野上村龜山清吉　三好村井上喜十郎　常盤村新井發太郎　田沼町尾崎喚七　氷室村須藤佐五左門　葛生町成瀬彦太郎
同足利郡足利町川島卯五郎　水郷村岡由榮勝作　毛野村川島岱藏　富田村豐田竹次郎　吾妻村川村清作　久野村龜岡勢次郎　梁田村長眞一郎　筑波村倉上藤七　御厨村秋田啓三郎　山邊村柳澤卯重郎　三重村川島喜一　山前村篠原千馬　葉鹿村阿部金太郎　三和村石川金重郎　小俣村植木浩　菱村額川乾二

同芳賀郡眞岡町小倉芳藏　中村根本一郎　長沼村白井善治　大內村黑崎善九郎　久下田町小倉常三郎　物部村濱野重吉　山前村藤井兵吉　田野村齋藤次郎吉　益子町飯塚倹次郎　七井村手塚房吉　逆川村河原源九郎　茂木町天谷與平　中川村吉內龜次郎　須藤村平野房一郎　小貝村石川子之太郎　市羽村仁平福太郎　祖母井村杉田貞次郎　南高根澤村岡田與左エ門　水橋村高橋新三郎　淸原村岡田眞三郎

靜岡縣賀茂郡城東村太田善吉　松崎町稻葉喜吉　稻梓村山屋樂勇　稻取村山田織也　南中村笠井藤太郎　下田村橋崎淺次郎　下河津村　正木彌吉

同庵原郡內房村遠藤眞助　小島村山本文助　由比町望月省三

三重縣多氣郡下御糸村三宅龜之亟　大淀村世古口周助　明星村中瀨惣八　西外城田村中西治郎助　津田村逵井丸八郎　五ヶ谷村波多瀨市之助　川添村猿木榮助　荻原村吉田六郎　東黑部村木本恒五郎　齋宮村前田安太郎　上御糸村須田政太郎　相可村森田鹿松　佐奈村秋山米太郎　丹生村新拾戶安吉　領內大杉谷組合村天野鶴助

大分縣西國東郡高田町小野崎萬藏　同片多昇　河內村安東惠二　田染村安東耕太郎　田原村田原丈太郎　朝田村馬場貞五郎　東都甲村中野伊之吉　西都甲村加藤司　草地村近藤建止　呉崎村和田慶司　西眞玉村渡邊正　上眞玉村岡田末治　中眞玉村井上愛松　臼野村宗儀一郎　三浦村多田惠吉　岬村岡田梅松　三重村舛田三九郎

同南海部郡西上浦村緖方善吉　大入島村吉田鶴藏　木立村山內韓留　西中浦村後藤利三郎　蒲江村安部庄吉　青山村塩矢勘太郎　上堅田村工藤佐太郎　明治村岩崎常次郎　中野村川野宇八郎　川原木村安藤伊曾藏　切畑村川田太十郎　東上浦村河本政吉　八幡村江畑保藏　佐伯町黑田千代藏　東中浦村吉田金五郎　米水津村米村金藏　入津村日高由松　名護屋村鹽月米太　下堅田村吉富善三郎　鶴岡村高司峰太郎　上野村出納長作　因尾村高野孫二郎　直見村戶坂想太郎

同下毛郡豐田村横山武吉郎　大江村大塚勞太郎　小楠村白見顯造　鮎房村廣永富造　大幡村中尾捨造　如水村原田達吉　和田村芝原恵津造　風田中鶴松　耶馬溪村小松助造　尾張村谷口鋼太郎　三保村伊藤多金治　山口村桑恒龜松　眞坂村淸源長吉　深秣村松田藤市　東成井村田中作造　城井村新貝元義　津民村川原口市郎　上津村西房太郎　東谷村部甲幾六　西國村河野甚三　槇山村矢野岩雄　山移村西時松　下郷村江渕榮　三郷溪部　槇木村相眞良二

同北海部郡內小曾戶俊男

同東國東郡竹田津村下恒惠球　上伊美村中野眞澄　伊美村衣笠溥　熊毛村丸小野藤治　來浦村石村繁　富來町佐藤春吉　朝來村飼溪正太郎　西安岐村松原幸房　安岐町永松壯三郎

同速見郡別府町宮田定治　石垣村佐藤倉一　朝日村相原秀太郎　御越村後藤謙豐　岡町城內衞　日出町武野榮次郎　藤原村伊藤新五郎　川崎村吉野熊太郎　天神村佐藤德晉　東村阿部傳七　八坂村原田齋兵衞　杵築町寺川永吉　北杵築村福田幸太郎　東山香村佐藤郡治　中山香村行重庄太郎　立石町塔花謙十郎　山浦村佐藤定雄　上村佐藤金晉　宗端村三重芳雄　北山香村荒木虎彥　南由布村立川安三郎

同大野郡井田　柴原、長谷村上野淳　大飼町渡邊久郎　戶上村後藤乙市　三重町新田、菅尾、百枝村玉田耕一郎、東大野、中井田、田中村勝瀨彦太郎、東大野、菅尾、大野村安東駿　同後藤雄二郎　小富士村兒玉鎮隆　合川村和田次男

●本會職員の出張

本會書永講師は去四月十三日茨城縣東茨城郡要根村に開催したる蠶絲業講話會に出張同十七日歸京せり。

●各支會の品評會開催

本會各支會に於て支會事業として品評會を開設すること毎年十餘所内外に達し蠶絲の改良及統一上少からざる効果あるのみならず地方蠶絲業の發展に資すること大なるものあるを以て好評嘖々たる所なるが今日まで其開催を決定せし支會及開催地等は左の如し。

新潟支會	開催地	高田町	開期	十月中
山形支會	同	上山町	同	十月九日より同十五日まで
下野支會	同	宇都宮市	同	十月中旬
鳥取支會	同	鳥取市	同	十月上旬
宮城支會	同	氣仙沼町	同	十一月二十日より同二十六日まで
石川支會	同	小松町	同	十一月中
山口支會	同	久賀町	同	十一月中
長崎支會	同	長崎市	同	十一月頃
高知支會	同	高知市	同	未定
岐阜支會	同	中津町	同	四十五年三月中

●今野福島支會副會長の訃

今野氏は嘗て埼玉支會副會長當時より本會の爲に盡瘁する處少ならず、既に二等有功章を受領したる人なるが、病軀の爲一時職を辭したるも氏の材能は永く閑地に置くを許さず再び福島縣事務官に任ぜられ次て本會の福島支會副會長となり上下の信望厚かりしが再び病に臥して遂に起たず本月一日壯年有爲の資を抱き溘然として逝けるは洵に哀悼の至りに堪へずして本會會頭は同日直に鄭重なる弔電を發送したり。

蠶桑雜觀

▲東宮御所内の御養蠶　東宮妃殿下には深く蠶事に御心を注がせ給ひ去四十一年より毎年十四五匁の蟻蠶を御掃立遊ばさるゝことなるが本年は御大病中如何あらんと思ひ居りたるに例年の如く蠶兒を飼育せよとの御沙汰ありたる認め有泉善三氏之が主任となりて一切の準備を整ひ御所に御保存の蠶種は去月二十四日に、日本種は同十七日に、歐洲種は本月一日に都合十五匁の蟻蠶を掃立てさせられたる由而して桑葉は一昨年　妃殿下の思召にて　皇孫宮御殿に程近き處に五段歩程を仕立させ給へる御桑園より收めて三眠まで飼育し四眠以後は　故英照皇后御在世の砌御設けの桑園の一部及荒川沿岸の桑園のものにて、御飼育あらせらるゝ筈なりといふ。

▲上田蠶絲專門學校入學試驗問題　上田蠶絲專門學校にては東京上田の兩所に於て入學試驗を行ひ養蠶科四十八名製絲科四十五名に對し入學を許可し去月一日より開校したるが其入學試驗問題は左の如し。

化學　二時間

（注意　答案は横書にすべし）

（一）酸、鹽基及鹽とは如何なるものなるか、又其れ等が水溶液中に於ける狀態を說明せよ

（二）次の語を例を擧げて說明すべし

（a）同素體　（b）同分異性體　（c）炭水化物　（d）炭化水素

（三）次の場合に起る反應を化學方程式を以て示し且其成生物の名稱を附せ

（a）大理石に鹽酸を作用せしめしとき

（b）銅に硝酸を作用せしめしとき

（c）過酸化バリウムに硫酸を作用せしめしとき

（d）炭化カルシウムに水を作用せしめしとき

（四）溫度攝氏十二度壓力七百六十五ミリメートルのときナトリウム十五瓦に水を作用せしめて生する水素の容積及重量を問ふ但しナトリウムの原子量は二十三とす。

以上　問題

物理　三時間

（注意　答案は横書にすべし）

（一）彈丸を地平より垂直の方向に一秒二百五十米の速度にて發射したりとす然る時は此彈丸は發射時より幾秒の後一秒五十四米の速度を得るか、又其時までに彈丸の經過したる距離を問ふ。但し空氣の抵抗はなきものとす。

（二）喞上喞筒の理を說明せよ、此喞筒を用ひて水を水面より幾尺の高さに上ぐることを得るか。

（三）烟突は如何なる理に基き如何なる目的に用ひらるゝか。

（四）光の屈折の定律を述べよ。

（五）電動機に就きて知る處を記せ。

以上五問題

第五號

動物及植物　三時間

（注意　答は綴書にすべし）

動　物

（一）基礎の壁面とは如何

（二）次の動物の驅する門綱目から問ふ

ネコ	カヘル	ネヒ	エビ	アサリ		
バッタ	トビ	ウマ	イヌ	ダニ		

（三）鳥類の體造を細解せよ

植　物

（一）植物體を構成する主要なる元素を挙げて其給源を說明せよ

（二）地衣類の特徴を問ふ

（三）左の植物の普通食用に供する部分は植物學上如何なる部分なりや

サツマイモ	ナトイモ	ジャガ	カブラ	
イネ	セン	タマ	フラルマ	
			メヤガ	エンドウ

以上各六問題

數學　六時間

（注意　答案は綴書にすべし）

（一）甲乙二つの貯蓄あり之甲に六百二十圓、乙に五百四十圓の貯蓄を利殖す、或る原因のため甲乙兩貯蓄より同數の金額を出したるに因り甲の貯蓄の數は乙のそれの三倍となれりと云へり甲乙兩能に生存せる貯蓄の數數幾何なるか。（貯蓄）

（二）$|x|+|x-1|=x$ なる關係を分數に直せ。（代數）

（三）次の聯立方程式を解け

$$\frac{1}{x}+\frac{1}{y}=\frac{5}{6},\quad \frac{1}{x^2}+\frac{1}{y^2}=\frac{13}{36}\text{（代數）}$$

（四）x^n-a^n なれば直線を分離とせる直角三角形の直角の頂點の軌跡を求む。（幾何）

（五）正六角錐の高さ a 時、底四の一邊の長さ b 時なる時其表面積を求め併て體積の理由を記せ。（幾何）

（六）a、b、c を三角形の角角とし、a、b、c を其對邊とすり、若ある時は次の關係あることを證明せよ

$$a\sin C=c\sin A\ \text{（三角）}$$

（七）次の方程式を解け。

$$\sqrt{x+a}+\sqrt{x+b}=2\ \text{（三角）}$$

以上七問題

國語及漢文　三時間

（注意　答案は綴書にすべし）

第一、解釋、書取及文法

一、左の國文を平易なる口語に解釋せよ

世の人身の貴く賤きか差べすとみさかえ富はず寡でざるかとう寡にすれども何のよき寡なく賤きか差べすとみさかえ富はず寡でざるかとう寡にすれども何のよき寡なくむとくわやうなる狂舞をしてあながちに賤むにこそけれしもいほどゝ云へるかぎりなくいそしくつとめてなりの行り富みさかえむこと父母にも先祖にも孝行なるべ

二、左の漢文に句讀點及讀點及讀點名を附し且各句に示す玉人之子堂日我

宋人得玉獻子堂堂日我以玉爲寶若以與我皆喪寶也我與子各有其寶

以不食爲寶獻子堂堂日子爲仁人也以義爲寶子得玉而喪之子堂堂日我

三、左の物語を編ずる點に注意を加へて

ちゝはゝにいひけるは　はゝ　ちゝ　はゝ　ちゝ　はゝ　ちゝ

月風 慈燈 立宜 銀百 波事 耀宏 同 孤光 身發 甲勳 俊吟 洋鬱

観櫻士運河 孫陽人興氏之企畫 同

勢 雲霞 望 聲客 僕化 植工 文 物江 柳新 波寄 由源 此球 恵中

過櫻士運河遣砂風 同

紅 海 映 雲 土日 歳 過者 天此地 雪明地映 雲 遊 霞 翠 年 遊 雲 月 遊 雲 月 遊 雲 月

何やら他から聞いた話を聞いて、主の笑顔と見の顔とを比べて見ては、若葉寄に明るく家の前に出て居る。蠶繭しの黄色い繭が、五に桑の葉の中に、蠶繭の中の蛹を、若葉寄に明るく家の前に出て居る。蠶繭しの黄色い繭が、五に桑の葉の中に、蠶繭の中の蛹を、若葉寄に明るく家の前に出て居る。

▲人　賞

蠶に籠つた姿の心　解いて笑顔のうつる鏡

仙　臺　岡田みの子

▲地　賞

黄ばむ麥田に雲雀も老いて　蠶飼する娘の面やつれ

京　都　小雲素華

▲天　賞

雲の信濃路へと消えて　家奪平したるお蠶蹟

仙　台　岡田絲愛

▲選者吟

蠶成時笑つて曰く　繭を作るは私の役

鬼　川

懸賞募集　一口噺（第三十六）（前號續）

▲秀　逸

◎食はれた

仙臺　名取絲友

甲【私の主人は綿糸に手を食はれたと云つてるよ】

乙【何の主人は綿糸に手を食はれたと云つてるよ】

◎蠶の着物

京都　行谷桑雅

蠶後蠶はたくさん着物を脱ぎますか】

先生【ずゐぶん〳〵脱ぎますよ】

◎大　食

京都　足立玄水

小僧【お父さんは飯を多くにさ薄山蠶に多く食はしてはいけませんと云ふナと小僧【でも先生は飯を前に大食してはいけないと云ひましたから】

◎貯　桑

熊本　相澤蠶狂

父【蠶に桑を貯へて居るのに明朝は雨が降りさうだ】子供【それでは桑を全部切取つて貯蔵庫へ入れませうか】

▲人　賞

◎△　△

武蔵　土方香蓮

先生【蚊に蚊が十個あります、其内七つ食べたら後はどうなりますか】

生徒【みんな食べたくなります】

▲地　賞

◎桑と英語

京都　伊東スミレ

甲【桑と云ふ字を英語で何と云ふだらう】

乙【桑港と書いてサンフランシスコと云ふから、桑と云ふ字はサンフランシスと云ふさ】

▲天　賞

◎害　蟲

奈良　岩本百年

父【坊やそんな蟲を殺してはいけませんよ】

子供【でも學校の先生は桑の害蟲を殺せと云ひましたもの】

父【先生は桑の害蟲を殺せと云ひましたもの】

懸賞募集

寫生文

高橋鬼川選

▲秀　逸

◎雨後の桑園

徳島　田幡仲歳

雨上りの桑園に行つた。向ふの畑から、式がさしてはやつと桑の樹に矢張り明るくなる。何処からか白い蝶が飛んで来て、ひらひらと蝶の間に舞れ、軟いて蔓を捲いて居ると、強い枝でまた雨が降出した。

◎涙の流れ

羽後　東海林桑翠

銀色にて、たるる、たるる、雨の涙。雨ふる桑の葉の間で何やらしたと女が、桑畑をかけた後つて居ると、向ふの桑の葉の間から、其の白い顔映つて、桑の葉が、ぱらと、乙女の笑顔笑つた。自分の影が見えたのであらう。

◎獄　樂

羽前　青木枯葉

野良と鋤を背負ひ、若い男が、獄の樂しさ、男は、獄つて居る。二人の獄には過ぎし春の朧月夜、此体の石に腰かけて、之を聞ゆる獄ゆる獄ゆる獄

四月中の蠶界小誌（本欄へ御投）

四月一日　荒木蚕学士氏の蠶命論に於て教蠶共同飼育に於て蚕の進化度に注意致御の為講習会開催し種々の事項を協定し個小育蚕技師の講話がありたり

三日　千葉縣印旛郡公設分場に於て蚕の飼育に於て蚕の生理を研究し種々の事項を協定し個小育蚕技師の講話がありたり

三日　佐松氷保作氏の記の病毒及び本邦の蠶種製造の沿革講演会開催せり

五日　千葉縣印旛郡八冬村下瓜田蠶業組合にては補給蠶種製造教師の為蠶業講習会開く

六日　長野縣下郡蠶業試験場蠶種製造の沿革講演会開く

七日　新潟縣各郡蠶業技手蠶業協議会を本年春十時より開催し於て開会石川農事試験場長の挨拶あり引続き蠶種の改良に関する講演あり

八日　山口縣郡蠶業試験所の開設式

九日　新潟縣立蠶業試験所に於て蠶種製造業組合長の講演あり

十日　長野縣下郡蠶業試験場蠶種製造業者の為講演あり

十一日　長野縣下郡蠶種製造業者の為講演あり

十二日　佐賀縣小城郡蠶業組合蠶種製造業者の為講演あり

十三日　山口縣郡蠶業試験所に於て蠶共同飼育の為講演あり

十四日　長野縣下郡蠶種製造業者の為講演あり

本會依頼に依て蠶種製造業者の為講演せり

蠶海涓滴

△四十三年　度に米國へ清國生糸の輸入数量多少増加せるも清東絲の改質に基き仲生糸の輸入を減じたるは共他糸価本邦絲糸に劣るとも高きが為めなりとは。

△米國商務　官の報告に蠶の耳好と供給の低廉と蠶戦場捕獲一の蠶絲業世界蠶絲の覇権を争はるも其れ伊太利と移り清国本邦蠶業の衰微を望むや切。

△本月一日　只来潮東大北の各郡に蠶々神祭あり天蠶国の神者祭りて蠶の繁盛を祈願し各郡に於て盛況なりしと。

△鹿島駐信　尖熱松用約表二日全村蠶苦に罹り蠶繭二割減なる旨郡役所に報告せるも全く是減な原因等に蠶の原因に基き蠶の為に蠶の為に蠶の為に

之を讀むべしである迄、編者の眼に映にたる本書は價に成金な夢むる人々のみ於手にすべしである、情に急に現代青年に對する好餌調の強味なるもの、なる以て世の青年諸氏に本書を左右に置くべし、(定價一圓二十錢發行所東京市本郷區弓町一の四明文堂)

蠶絲業法之經過 全　　蠶業新報社編

明治二十七年の議會に提出せられたる蠶絲業法案は、天下の耳目を驚いたるのに先て我蠶業界にはあるまい、蠶業者或は之が廢止を唱へ或は之が修正を唱ひ、或は之が存置を主張して、之を爲に政客は角逐を演じて之を論ずる者忘れて之を論ずる者忘れて之を論ずる者忘れ

42		3.694.823

La quantité de graine conservée pendant l'année 42 est deux fois plus grande que celle de la 39 ème année La quantitée des graines conservées dans une gortte est en moyenne de 9338 pepiers dans la 39 ème année et de 15064 papiers dans la 42 ème année. L'accroissement pendant l'année est de 5727 papiers (l'accroissement est 60% de la 39 ème année), On trouve que les graines conservées et employées augmentent gradeullement.

Pour la quantité de conserves et le nombre des grottes, Naganoken est le premier. Nagasaki, Yamaguchi, Gifu, Yamagata ont plus de 10 grottes, et les autres moins de 10.

	Nombre de grottes			La quantité de graine conservée		
	39 ème annee de	Meiji 42	39	40	41	42
Hokkaido	—	—	—	—	—	—
Tokyo	—	1	—	—	500	300,000
Kyoto	—	1	—	2,013	2,480	pas encore connu
Osaka	—	—	—	—	—	—
Kanagawa	—	—	—	—	—	—
Hyogo	1	—	800	—	—	—
Nagasaki	9	11	39,282	69,535	87,500	85,175
Niigata	—	3	—	—	—	4,657
Saitama	—	3	—	3	138	1,470
Gunma	3	7	19,475	59,654	103,641	141,072
Chiba	—	—	—	—	—	—
Ibaraki	—	—	—	—	—	—
Tochigi	—	—	—	—	—	—
Nara	1	3	6,000	3,400	52,000	66,200
Miye	—	1	—	3,600	5,000	4,800
Aichi	—	1	—	—	—	20,000
Shizuoka	3	2	29,550	43,000	42,143	58,367
Yamanashi	14	20	174,622	251,088	479,800	573,630
Shiga	—	1	—	—	3,054	911
Gifu	2	16	1,135	30,527	59,128	95,578
Nagano	54	112	583,307	1,095,456	1,561,903	1,872,767
Miyagi	5	5	86,191	90,530	152,600	168,066
Fukushima	2	9	39,074	144,829	200,562	214,404
Iwate	—	1	—	1,200	3,000	2,500
Awomori	—	—	—	—	—	—
Yamagata	6	12	10,404	30,833	79,082	82,650
Akita	—	1	—	—	—	738
Fukui	—	2	—	1,800	2,200	3,400
Ishikawa	—	—	—	—	—	—
Toyama	—	2	—	1,700	2,780	2,960
Tottori	—	5	—	1,000	9,896	11,786
Shimane	5	5	90,779	98,163	125,614	135,122
Okayama	—	1	—	—	2,500	5,596
Hiroshima	—	1	—	800	1,200	4,500
Yamaguchi	—	—	—	—	—	—
Wakayama	—	3	—	510	25,700	2,924

Tokushima	—	2	—	1,000	9,100	4,700
Kagawa	—	—	—	—	—	—
Ehime	3	4	685	2,211	3,325	6,925
Kochi	4	5	976	3,442	4,815	5,806
Fukuoka	—	—	—	—	—	—
Oita	4	1	5,500	26,550	32,500	45,300
Saga	—	—	—	—	—	—
Kumamoto	—	—	—	—	—	—
Miyazaki	1	1	4,720	12,200	22,148	23,800
Kagoshima	—	1	—	—	—	—
Okinawa	—	—	—	—	—	—
Totaux	117	244	1,072,498	2,005,644	3,074,608	3,675,763

3. Réfrigérateur (Réfrigérant)

En réfrigérateur, si la chambre est tenue à la température d'environ 40°F., la chambre est bien suffisante pour conserver les graines. En pratique on doit préparer la chambre pour conserver les graines, avant de les mettre hors du réfrigérateur, la chambre garde une température un peu au dessus de celle de la conservation. On appelle la chambre comme l'autre " Kinrishitsu."

5. Glacière.

La glacière est aussi employée comme chambre réfrigérante. A ma station nous avons fait deux façons de glacières.

Dans ce but nous employons la glacière qui est une sorte de boite pour la conservation de la graine pendant l'hiver. Elle est constituée par deux boites et la boite extérieure est longue de mètres.

A travers la couche de blocs de roche un courant d'air assez froid qui vient de l'intérieur. Pour la chambre de conservation on a fait la caverne de la dimension de trois mètres sur cinq, ayant une profondeur de deux mètres et demi. Et on élève des murs de chaque côte avec des roches. En haut il y a des charpentes et encore au-dessus des roches, et de la terre sur une profondeur de 15 centimètres, et on fait la toit couverte de chaume.

4. Grotte de Komuro. (Shinshû).

A Ōkno, Kuwabemura, Kitasakugori, Naganoken. Le village a convenu de conserver de la glace naturelle jusqu 'en été, et autrefois la glace du village etait offerte au Seigneur féodal.

Dans le village pour conserver la glace on la met dans une caverne en blocs de roches et au desens on couvre seulement avec de la paille. Pour conserver le grain de vers à soie on fait la caverne de quatre mètres sur trois, et de chaque côté sont laissées des interstices entre les roches. Pour défendre de la pluie on pose un toit de charpentes.

La température dans la grotte est variable suivant la construction et la nature de la roche de la grotte. Pendant l'année en août et Septembre la température de la grotte est très haute et de cette époque la température descend graduellement.

De la fin de Janvier jusqu, en Mars la température est la plus basse de l'année. A partir d'avril en retour la température élève de nouveau. Pour conserver les graines de vers à soie d'automne la température de la grotte doit être au dessus de 43° F à la fin d'août et au commencement de Septembre. Si la grotte ne maintenait pas la température, les graines seraient conservées jusqu au moment où la température s'élève au dessus de 43° F. Alors il y a quelques grottes capables de conserver jusqu'à l'élevage des vers d'automne ou pour conserver les graines d'été, ou soulement pour conserver des graines d'hivernation. La température pour conserver les graines de la grotte est fixée par l'observation. Par suite la valeur des grottes est déterminée.

CAVERNES NATURELLES.

Ce sont des cavernes, formées par d'eruptions volcaniques.

Dans les cavernes il y a des glaces éternelles. La glace est venue de l'eau qui a pénétré le terrain, et encore par l'ouverture des roches de la caverne, et il gèle dans la caverne.

Bien etendu il n'y a pas de courant d'air froid mais la température est de 32°F toute l'année et invariable. La caverne est au pieds du versant inférieur de la montagne Fuji (et Unzendake, Nagasakiken.)

Il y a deux cavernes sur le versant inférieur du Fuji, et on les appelle Fujifuketsu et Fugakufuketsu. Naturellement il y a dans les grottes un courant d'air froid.

Fujifuketsu est dans le domaine impérial d'Aogahara, Kamikuishinmura, Nishiyatsushiro, Yamanashiken. Nord-Ouest de la montagne Taiho sur versant inférieur Nord-Ouest du Fuji, à 1100 metres au-dessus du niveau de la mer. On a écrit qu'il y a 1040 ans (Quatrieme année de Teikwan) quand le Fuji eut une éruption, la lave couvrit le versant inférieur et fit beaucoups de cavernes.

De l'entrée de la caverne on descend par une pente rapide à environ 7 mètres. De là, la pente est douce, les dimensions et la hauteur sont variables. A l'endroit où les dimensions sont les plus grandes, la largeur est d'environ 18mètres, et la hauteur de 6 mètres. Et le fond est rempli de glace épaisse qui ne fond pas de toute l'année.

Il y a des stallactites et des stallacmites qui se rejoignent. Quand on marche sur la glace en pente douce d'environ 45 mètres, la caverne se divise en deux. Leurs extrémités ne sont pas connues. Les chambres destinées à conserver des graines sont construites dans la caverne et directement en bas de l'entrée de la caverne, il y a encore une chambre. La chambre de l'entrée au deuxième étage les dimensions sont de 18 mètres sur 10.

La première chambre dans la caverne a 45 mètres de largeur et les autres environ 80 mètres. Les graines sont conservées encore dans des boites dans la chambre.

La boite pour les graines est longue 1 shaku 9 (60 c m.) large 0.shaku 85 (25.4 c m.), profonde de 0.shaku 25 (37.9 c.m.)

Le papier de graine est supporté par des bâtons de bambou et la boite est encore converte avec des plaques de zinc, et avec une couverture comme de la couverture de boite a pilules.

Dans la caverne de la glace la température se maintient toujours au dessus de 32°F. Fugakufuketsu a la même construction, et les chambres de la conservation que le Fujifuketsu.

Les endroits où la graine de vers à soie est conservée, sont au nombre de 244 à Tokyo fu et aux 32 autres ken et le nombre des graines qui sont conservées est de plus de 10.000.000 papiers. (y compris le réfrigérant et la chambre de la neige pour conserver les graines). En l'année 39 de Meiji le nombre des grottes etait de 127.

Les quantités de graine conservée sont comme suit :—

39 ème année de Meiji	1.092.498 papiers
40	2.005.644
41	3.093.518

EMPIRE DU JAPON

CONDITION DES SOIES DE YOKOHAMA.

MOUVEMENT DU 1er AU 30 Avril 1911.

Mois et Années.	Conditionnement des soies grèges. Nombre.	Poids net.	Poids conditionné.	Moyenne de la perte au cent.	Pesage des soies grèges. Nombre.	Décreusage des soies grèges. Nombre.	Essais des soies grèges. Nombre d'épreuves.
Avril 1911	3,960	170,241.30	167,785.06	1.44	165	"	4,675
Mois précédent	2,863	153,190.01	150,769.17	1.59	117	"	4,517
Avril 1910	3,431	171,102.45	168,573.89	1.48	98	"	5,063
Total depuis Janvier. 1911	12,348	641,460.00	631,126.28	1.61	501	"	16,273
" " 1910	11,702	593,420.09	584,400.58	1.52	359	8	18,577
" " 1909	11,657	583,652.70	574,010.83	1.65	76	"	16,508
" " 1908	9,772	478,215.78	469,513.78	1.82	"	"	10,044
" " 1907	8,085	369,644.07	363,887.92	1.56	"	"	6,728
" " 1906	10,705	509,211.59	499,590.47	1.89	"	4	7,985

Le Directeur par Intérim de la Condition des Soies,

N. IMANISHI.

Sur l'endroit où la graine de vers à soie est conservée.

Pour conserver des graines de vers à soie, un endroit frais est néssesaire. Spécialement, pour conserver les graines du ver d'été ou d'automne, l'endroit doit etre assez froid pendant toute l'année aux environs de 40° F., parceque comme nous l'avons déjà dit, à cette température les embryons ne se développent pas. Mais, elle est suffisante pour conserver les graines annuelles d'autant mieux que les boites sont moins sensibles à la temperature extérieure et elles doivent etre placées dans l'endroit le plus froid de la maison, ou dans un magasin qui a les murs doubles afin de la rendre moins sensible à la température de l'extérieur.

Un endroit bon aussi sont les grottes construites avec des blocs de roches dans les montagnes avec un courant d'air assez frais qui y circule toujours. Dans la grotte un petit magasin est etabli dans lequel les graines sont conservées. Il y a 40 ans que les grottes sont employées pour conserver les graines au Japon.

Il y a au Japon 244 grottes capables de conserver des graines et dispersées un peu partout. Parmi ces grottes 43 ont été experimentées par ma station.

DESCRIPTION DE QUELQUES GROTTES DE SHINSHU ET KŌSHU.

1. Grottes de Tsutaki (Kōshū).

Sur le versant inférieur de la montagne Nozoki, Kitakomagōri, Yamanashiken.

C'est une cassure dans la roche schisteuse. Un courrant d'air assez frais dans l'intervalle des blocs. On fait la caverne de la largeur de quatre mètres et de la profondeur de deux mètres.

On met de chaque côté de la caverne des blocs qui n'arrêtent pas le courant d'air froid. En haut des charpentes sont placées et dessus des charpentes encore des roches, et on fait un toit de charpentes contre la pluie. Et du côté nord du toit on met une ouverture de un mètre de largeur sur 1.5 de haut.

2. Grotte de Akegataira (Shishū).

Sur le versant à 450 mètres du pied de la montagne Akegataira, Azumimura, Minamiazumigori, Naganoken, l'endroit de la grotte est dans la même couche que celle de la grotte Tsutaki. On a fait la chambre de conservation de la dimension de dix mètres sur cinq.

Et on a construit un deuxième étage au dessus de la chambre et on emploie l'étage pour le traitement de la graine après qu'on la sortie du magasin de conservation.

3. Grotte de Betsho. (Shishū).

Dans la foret sur le versant supérieur de la montagne de Midzusawa, Betshomura, Chiisagatagori, Naganoken.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours Days.	Arrivée. Arrived. (Soie. Silk.)	Vendue. Sold. (Soie. Silk.)	Renvoyée Sent back. (Soie. Silk.)	Exportée. Exported. (Soie. Silk.)	Noms des filateurs Names of filatures.	Prix. Prices. (Maximum du prix. Highest prices.)
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	462	438	15	—	Yajimagumi	915
2	—	—	—	—	——	—
3	—	—	—	—	——	—
4	994	343	47	—	——	—
5	249	421	25	462	Yamatogumi	900
6	334	371	36	—	——	—
7	350	633	46	151	Yajimagumi	910
8	551	289	69	192	——	—
9	—	—	—	—	——	—
10	693	274	70	—	——	—
11	294	328	34	652	Kōsnisha	880
12	307	725	32	485	Okayakan	885
13	236	374	58	—	——	—
14	504	412	33	—	Sasamotosishi	905
15	278	366	26	—	——	—
16	—	—	—	843	——	—
17	794	146	21	—	——	—
18	447	328	20	—	——	—
19	277	318	13	686	Kōsnisha	885
20	351	590	13	—	Atagosha	940
21	317	160	11	124	——	—
22	475	235	27	179	——	—
23	—	—	—	—	——	—
24	550	314	7	—	——	—
25	390	199	20	437	Kōnansha	905
26	308	369	19	289	——	—
27	329	289	33	—	Takizawasoishi	930
28	453	434	39	—	Komatsugumi	865
29	294	555	39	584	Fukokukan	870
30	—	—	—	354	Kyōtō-hinedaruma	870
31	—	—	—	—	——	—
Total	10,208	8,920	753	5,438	——	—

1 yen vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Avril 1911.)

	Report.	Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Export.	Renvoyé. Sent back.	A reporter. Brought forward.
	Picul.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Filature. Filature.	8,233	312	10,079	8,733	—	561	9,018
Zaguri. Reeled.	312		98	136	—	89	185
Kakeda. Orikayoshi.	279		13	51	—	75	166
Autres. Other.	30		18	—	—	28	20
Total.	8,854		10,208	8,920	5,438	753	9,389
1910.	14,017		9,358	9,403	5,312	1,312	12,061

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(April 1911.)

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois d'Avril dernier.

Comme continuation de l'inactivité de fin du mois précédent, et par suite des ventes à prix dérisoire opérées par quelques filateurs, les prix de la soie ont baissé. Shinshu Extra No 1 a été coté à yen 860. Mais, vers le milieu du mois, notre marché a présenté quelques activités causées par la hausse des soies à terme fixe, Shinshu Extra a regagné les prix de yen 880. Toutefois, les vendeurs manquant de force de résistance, les acheteurs ont profité de la circonstance pour faire des achats à bon marché; les prix ont donc continué à baisser et, non seulement ils ont fléchi à yen 840, mais encore ils ont présenté même la tendance de baisser tantôt de 10 yen, tantôt de 15. Ainsi s'écoula le mois dans une extrême accalmie.

THE RAW SILK MARKET OF YOKOHAMA.

The condition of the Yokohama raw silk market during April was altogether dull. It had been at a low ebb since the end of the previous month, and was made more so by certain raw silk producers who sold their goods at a loss. At one time Shinshu Extra No. 1 went as low as 860 yen. Then a rise in the raw silk sold on term gave certain activity to the market, and Shinshu Extra No. 1 went back to 880 yen, yet the buyers took advantage of the sellers' weakness, and fall after fall in the quotation resulted, until 840 yen was reached or even ten to fifteen yen lower. In this poor state the month came to the end.